

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8001

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 1-1

研究計画No.1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存・整備に関する調査研究（受託）（（1）－①－ア）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 清水重敦
【スタッフ】	清水重敦 [文化遺産部景観研究室長]、恵谷浩子 [同部研究員]、松本将一郎 [同部アソシエイトフェロー]		
【年度実績概要】	本受託事業は、「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存・整備に関する調査研究の2年目として、重要文化的景観の追加選定を目指す宇治市白川区を対象に、現存する伝統的建造物の価値評価を目的として実施した。現地調査では、1次調査として区内に残る木造家屋や近代建築の残存状況を悉皆的に把握し、次に2次調査として個別の建造物についての詳細な調査を行った。また、併せて、白川区の集落構造や主要な生業である茶業についての分析も行い、今後の保存・活用に向けた基礎資料の提示を行った。本調査の成果は、宇治市により本年度刊行される『宇治市文化財総合把握調査報告書Ⅰ』の原稿として執筆するとともに、宇治市主催「白川の伝統的家屋調査中間報告会」において成果報告を行った。 1次調査では、近世から昭和30年までの間につくられた109件の伝統的建造物を確認することができた。この1次調査の結果を踏まえて抽出した10件の家屋を対象に2次調査を実施し、その歴史調査、実測調査、写真撮影を行い、配置図・平面図・断面図の作成と価値評価を行った。2次調査の対象は、茶農家や茶工場、覆小屋などの茶業関連家屋のほか、茅葺建物や米農家の建物など、集落の変遷や生業の特徴を示すものとした。ただし、今回は「宇治の文化的景観」に関する追加調査として、既選定地区である中宇治に所在する2件の伝統的建造物、また将来的に選定を目指す黄檗地区の1件についても個別の実測調査を行った。 本調査の成果として、①白川区における伝統的建造物の残存状況を把握し、その建築類型と分布特性を捉えられたこと、②金色院からの白川の歴史と建造物・敷地との関係を読み取ることができたこと、③茶工場を含む敷地構成や建物の在り方の変遷、中宇治との違いが具体的に明らかになったこと、④建造物を含めて茶業に関連する諸要素が揃った白川の特質を把握できたこと、があげられる。 本調査の成果は、「宇治の文化的景観」に白川区を追加選定するための基礎資料となるとともに、重要文化的景観選定後の整備・活用計画策定の視点を具体的に提示するものとなるだろう。		
【実績値】	調査票13枚、実測野帳45点、デジタル写真1390点、報告書原稿111ページ。		
【受託経費】	950千円		



服部家旧製茶場（明治5年）
手製製茶時代の茶工場。表通りに外壁を接する細長い長屋で、敷地側に戸口を開き、半間幅の横連子窓が二面に巡る。



旧白川共同製茶場（昭和30年頃）
製茶機械の普及に伴い建設された機械式製茶工場。敷地外の土地を新たに求めて工場を建て、木造トラスにより広い空間を得ている。

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8002

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 1-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	京都岡崎の文化的景観に関する保存計画策定調査（受託）（（1）－①－ア）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 清水重敦
【スタッフ】	清水重敦 [文化遺産部景観研究室長]、恵谷浩子 [同部研究員]、松本将一郎 [同部アソシエイトフェロー]		
【年度実績概要】 本受託事業は、H21年度より国庫補助事業である文化的景観保存活用事業として京都市が実施している「京都岡崎の文化的景観調査検討事業」において、京都岡崎地区の文化的景観の重要文化的景観への選定申出のための調査および保存計画策定を目的に調査を実施するものである。 現地調査では、岡崎の現況景観の構造的把握を目的として、土地利用調査、景観構成要素分布調査、生業分布調査を岡崎地区全域の悉皆調査を行った。その他、自然調査として岡崎公園の街路樹調査、疏水苑池式庭園における生態系調査、生活・生業に関わる資史料調査を実施した。なお、本調査の成果は、京都岡崎の文化的景観調査検討委員会（第1回～第3回）において調査成果の中間報告を行った。 本調査の成果として、①琵琶湖疏水・白川の水利用によって形成された都市・産業景観の特質を明らかにしたこと、②大規模土地利用を可能とする都市構造の変遷とその特質を明らかにしたこと、③岡崎の文化的景観を構成する諸要素（建築物、工作物、自然物、土地利用、産業等）の分布と特質を明らかにしたこと、④文化的景観保存計画における重要な構成要素候補のリストアップを行ったこと、が挙げられる。 本調査の成果は、平成23年度以降実施する予定である重要な構成要素の詳細調査と文化的景観保存計画策定に向けた基礎資料として活用する予定である。			
		 京都踏水会 1896年（明治29年）に、大日本武徳会遊泳部として開設。かつては琵琶湖疏水の夷川舟溜りをプールとするなど、暮らしの中での疏水利用がみられた。	
		 並河靖之七宝記念館 明治・大正時代に活躍した七宝家・並河靖之の旧邸。庭園は植治の作庭で、七宝焼の研磨と共に苑池式庭園に琵琶湖疏水の水を利用している。	
【実績値】			
調査票 21 枚、実測野帳 77 点、デジタル写真 1964 点。			
【受託経費】			
1,580 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8003

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 1-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	相川地区文化的景観 景観変遷・景観構造調査(受託)((1) - ①-ア)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 清水重敦
【スタッフ】 清水重敦 [文化遺産部景観研究室長]、恵谷浩子 [同部研究員]、松本将一郎 [同部アソシエイトフェロー]			
【年度実績概要】 本受託事業は、近世初頭に開かれた金銀山とそれに付随して形成された都市相川を中心とする領域である佐渡市相川地区において、文化的景観としての価値付け及びその保存計画の策定を目的として、景観の変遷及び景観構造の分析をおこなうものである。 調査は、歴史、文化財、都市構造、景観に関わる既存の諸調査の整理、史料・絵図類の収集といった文献調査と、現地における地形、植生、土地利用、都市構造の把握、生活及び生業に関する聞き取り、を実施した。 現地調査は8月、11月、3月に計4回実施した。景観上関連性が認められる金銀山、上町・下町の市街地及び周辺漁村、市街地を取り巻く段丘崖及び山林、段丘崖上に設けられた水田につき、概要を把握するための一次調査を実施した上で、史料・絵図類の収集、都市部における生活・生業と関連が深い海岸段丘の段丘崖における植生調査、都市部における地形実測、生業に関する聞き取り調査を、詳細調査として実施した。 本調査の成果として、①既往の相川に関する諸調査が専門分野ごとに分断されていたのに対し、総合的な視点から相川の景観を捉え直す上での基礎が得られたこと、②金銀山と交易という生業の2つの核が、景観のあらゆる局面に反映し、相川の文化的景観の特性を形作っていること、③この景観構造が、金山の幕府支配・明治政府管理から三菱鉱山への移管などの大きな変化を経ながらも今に持続していること、が挙げられる。調査成果は中間報告としてまとめ、次年度の調査へと引き継ぐ。この成果を踏まえて、文化的景観の価値評価をとりまとめ、さらに同地区の保存計画を立案し、重要文化的景観の選定を目指す予定である			
【実績値】 調査票 25 枚、デジタル写真 250 点。			
【受託経費】 2,697 千円			



海から見た相川

金銀山（右奥に見える頂部の割れた山「道遊の割戸」付近）と交易によって栄えた相川は、海沿いの下町と丘上の上町など、景観の多くの要素が生業の核をなす二極を構造的に反映している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「宇治の文化的景観」整備に伴う宇治橋通りの調査研究(受託)((1)－①－ア)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 清水重敦
【スタッフ】 清水重敦 [文化遺産部景観研究室長]、恵谷浩子 [同部研究員]、松本将一郎 [同部アソシエイトフェロー]			
【年度実績概要】 本受託事業は、重要文化的景観「宇治の文化的景観」の重要な構成要素の一つである宇治橋通り商店街を対象に、文化的景観としての整備を念頭に置き、伝統的家屋の特性をまとめ、整備の方向性につき一定の提言をおこなうことを目的とするものである。 宇治橋通りの伝統的家屋については、2009年度の受託事業として実施した中宇治地区を中心とする伝統的家屋調査において多くの成果を得ており、その成果を踏まえて、伝統的家屋の特性の抽出と、建造物としての整備の方向性につき、一定の方向性を提示し、合わせて関連する図面の作成をおこなった。 宇治橋通りに残る伝統的家屋は、茶業関連家屋と、近代宇治の活況を反映する諸職業の家屋、に大きく二分される。町家形の表屋が多く見られる中で、一部に宇治の茶業独特の建築類型が混じる(長屋門、茶工場等)。また、銭湯なども町家に類する形式ながら、独自の形態を有している。これら伝統家屋については、個々の特性に従った整備方針の立案が必要であり、その方針を提示した。 個々の物件の特性とともに、住居集合のあり方について特徴が見出せるところに、宇治橋通りの特性がある。それは各家屋と宇治橋通りの側溝との関係で、家屋正面の壁面線と側溝との間に間隙がないことである。これはかつて茶師屋敷が並んでいた宇治橋通りの特性を今に伝える痕跡であり、この特性を活かした整備方針を提案した。 本調査の成果は、「宇治の文化的景観」における整備方針の基礎資料となることはもちろんのこと、都市に関する文化的景観における家屋の整備を考える上での重要な先例となることだろう。			
 現在も茶製造をおこなう茶農家の町家 1階の底の軒が深い上、平格子を多用し、軒下空間を広く取る点に生業の反映がみられる。			
 通りに面する旧茶工場 通りに面して設けられた旧茶工場を整備、活用する要望があり、文化的景観としての整備・活用方針の立案が急務となっている。			
【実績値】 家屋図面 30 点、デジタル写真 500 点			
【受託経費】 915 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8005

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 7-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	萬翠荘に係る学術調査(受託)((1)②才)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 島田敏男
【スタッフ】 大林潤、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部研究員〕、清水重敦〔文化遺産部景観研究室長〕、松本将一郎〔文化遺産部アソシエイトフェロー〕			
【年度実績概要】 萬翠荘は、旧松山藩主・久松定謨によって松山城南麓に建てられた久松家の別邸である。愛媛県では、当建築の重要文化財指定を目指して、その価値をあきらかにすることを目的として調査事業を計画し、当研究所が調査をおこなった。 調査対象は、萬翠荘本館、収蔵庫、旧管理人舎の3棟および庭園とし、敷地全体の調査をおこなった。 調査の結果、建築年代は、萬翠荘本館と旧管理人舎が大正11年、収蔵庫は昭和初年であることがあきらかとなった。本館の設計は木子七郎であり、旧管理人舎も木子と思われる。 本館は、鉄筋コンクリート造、小屋組を鉄骨造とする。建築様式は、フランス・ルネッサンス様式を基調とする、第2帝政様式と位置づけられる。様式の表現は、細部にわたって、ルネッサンス様式に忠実な意匠としながら、ステンドグラスにアール・ヌーボー風のデザインを取り入れている。平面は、1階に接客空間とサービス空間、2階に生活空間を置き、サービス空間からの導線を大階段の背面に隠すといった工夫がなされており、木子七郎の作品の特徴を良く示している。 木子七郎は、大正10年に海外視察をおこなっており、その前後で作風が変化する。様式に忠実であり、鉄筋コンクリートを用いる手法はその両方の要素をもったものであり、木子の作品としても重要な作品であることを明確にした。また、これまでハワイ製と伝えられていたステンドグラスの作家が木内真太郎と判明した点でも、当建築の資料的価値が高いことをあきらかにした。			
			
晩翠荘本館外観			
【実績値】 調査票 31 枚、実測図 13 枚、デジタル写真 3000 点、4×5 ポジ写真 42 点			
【受託経費】 2,500 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8006

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 7-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	倉見屋荻野家住宅調査(受託)((1)②才)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 島田敏男
【スタッフ】 黒坂貴裕、鈴木智大、番光、海野聡 [以上、都城発掘調査部研究員]			
【年度実績概要】 本受託事業では、福井県若狭町に位置する若狭町熊川宿重要伝統的建造物群保存地区内に位置する町家である倉見屋荻野家を調査したものである。倉見屋は、かつて宿場町で問屋を営んだ家で、主屋および倉で構成される屋敷地全体が、当地方のかつての問屋の形態を良く伝えるものと考えられてきたが、その価値付けが明確でなかった。このようななか、その価値を明確にし、重要文化財の指定を目指して、建造物の調査をおこなうこととなった。 調査の目的は、当家の建立時期および改造の経緯をあきらかにするとともに、当地区における問屋建築の特質を明確にすることによって、当該町家の価値を明確にすることである。その上で、保存に向けての方針および伝統的建造物群保存地区における活用方針を提案することを目的とした。 調査では、実測調査・痕跡調査・技法調査等によって、建築物の特性および改造の経緯を検討した。また、200点以上にもおよぶ家蔵文書の調査もおこなった。その結果、当家は、文化7年(1810)年の建築であり、建築年代が明らかな町家建築としては福井県内で最古あることがあきらかとなった。また、普請帳の調査成果を勘案すると、建築当初から改造がきわめて少ないことが判明した。そして、主屋と付属建物で構成される建築群が一体として熊川宿問屋建築のひとつの完成形として評価でき、さらには膨大な史料とともに当伝統的建造物群保存地区の歴史を示す重要な存在であることを示した。その上で、伝統的建造物群保存地区における公開民家として活用を提案した。			
【実績値】 実測野帳等 29 枚。デジタル写真 920 点、4×5 ポジ写真 25 点、作成図面 15 枚			
【受託経費】 1,853 千円			



倉見屋外観

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8007

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 8-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	日本／ユネスコパートナーシップ事業 アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究(受託)((1)-③)		
【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 高桑いづみ、飯島 満、俵木 悟、菊池理予(以上、無形文化遺産部) 七海由美子、松山直子(以上、特別研究員(アソシエイトフェロー))			
【年度実績概要】 今年度は、以下の事業を実施した。 ①国際会議等への派遣 ユネスコ無形文化遺産保護条約政府間委員会をはじめとする各国で開催される国際シンポジウムや会議、研究会等に無形文化遺産部の職員を派遣し、無形文化遺産保護に関する発表や助言を行うとともに、各国及び国際状況についての情報収集を行った。 派遣回数：11回 ②海外現地調査 モンゴル、ラオス、タイ、フィリピン等、アジア太平洋地域での調査を通じて、各国における無形文化遺産保護のための施策・取り組みについて情報を調査収集し、本テーマに関する意見交換を行いつつ、同地域の無形文化遺産保護に関する研究交流を行った。 調査回数：7回 タイ王国ランパン県民俗芸能伝承活動調査(H22.12.7)			
			
③国内現地調査 無形文化遺産として登録及び推薦された国内の案件を中心に、その保護活動に関する情報を調査収集し、関係者と意見交換及び研究を行った。 調査回数：24回			
【実績値】			
【受託経費】 24,573 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8008

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 12-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京薬師寺旧境内の発掘調査(資材置場北側搬入路)(受託)((1)－⑤－ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 小池伸彦、清野孝之、鈴木智大、桑田訓也、渡辺晃宏、森川実、中川あや、海野 聡(以上、都城発掘調査部)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)、青木達司(文化遺産部)			
【年度実績概要】 本調査は、薬師寺旧境内である奈良市西ノ京町内における防災設備の設置工事にとまなう事前の発掘調査である。調査区は防災設備の設置位置を含む逆L字型のトレンチを設定した。南北トレンチは幅約1m、長さ約4mと、これに接続する幅約2m、長さ9mで、東西トレンチは幅2m、長さ10mとこれに接続する幅2m、長さ21mであり、調査面積は計80㎡におよぶ。調査は平成22年8月16日(月)に着手し、調査区に応じて断続的に調査をおこない10月21日(木)に埋め戻しを完了した。 重機で地表より約165cmまで掘削ののち、作業員による掘り下げを開始した。池の埋め土とみられる暗灰褐粘砂土層を検出し、池の岸を検出した。一部、深掘りして、地表から約250cmまで掘り下げ、池の底の腐植土を確認した。遺構としては池1面、土坑6基、瓦土坑2基、東西溝1条、南北溝1条を検出した。池の上の整地層から12世紀の瓦器皿が出土したが、各遺構の年代については不明である。 これまでの調査・研究では、今回調査区の北側に僧房が存在したことは確認されていたが、この僧房の南側に建物が存在したかどうかについてはわかっていない。今回の調査の結果、池や排水にかかわる東西溝を発見した。 池の範囲では、自然木や松かさの混じる層があり、その下層には池の堆積、池底には水草の堆積があった。このことから池の周囲には松がたくさん生えていたものと考えられる。このあたりは中心伽藍から東に向け下がる地形で、この湿地状の地形を利用するために、池を何度も改修し、東西溝を掘って排水するなど、知恵を搾った様子が窺えた。 今回の調査では僧房南側の建物の存在は確認できなかったが、回廊の東側からわずか20mほどしかない伽藍中心付近まで池が広がっていたという、かつての周辺環境の一端を明らかとすることができた。			
			
東西トレンチの瓦溜り			
【実績値】 海野 聡ほか「薬師寺の調査」『奈文研ニュース』No. 39 2010. 12 海野 聡ほか「薬師寺境内の発掘調査―第474次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011(予定) 出土品 : 軒瓦12点、丸・平瓦80箱、土器・陶磁器2箱、鉄釘1点、炉壁片1点、竹片1点、種子8点 記録作成数: 実測図(A2判)14枚、遺構写真(4×5)22枚			
【受託経費】 1,882千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8009

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 13-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京薬師寺旧境内の調査(金堂周辺)(受託)((1)－⑤－ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 井上 和人
【スタッフ】 浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克(以上、都城発掘調査部)、 中村一郎・栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 A区：金堂南面の東よりに東西 1.6m、南北 12mの調査区。層序は上から現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層で、現地表面より約 80～90 cmほど下で複数の河原石を検出した。石の大きさは径 15～40 cmで比較的集中して出土した。石がない部分も石の抜取穴を検出し、本来は調査区一面に敷かれていたものである。石の間はやや隙間があり、石の上面も平らでないことから、人が歩くための舗装ではなく、庭園的な景観を意図したものと思われる。透水層の上に厚さ 40 cmほどの粘土の整地をした上に石をすえており、薬師寺造営当初の奈良時代の遺構であると考え。石の間や石の上にかぶる砂層から瓦器片が出ており、中世のある段階には埋没したようだ。 B区：金堂南面の西よりに東西 1.6m、南北 12mの調査区。現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層を経て、現地表下 70 cmほどで、井戸とそれとともなう溝を検出した。井戸は平面円形で2段掘りである。上段は直径 2.5m、深さ約 70 cmをはかる。その中央に直径 1 m、深さ約 70 cmの下段の穴をほり、木桶をすえていた。木桶の枠板は抜きとられており、竹のたがが残存していた。井戸の西北には溝があり、排水施設と考えられる。井戸本体と溝には上下2層の埋土があり、溝下層には中世の瓦器片が出土しており、中世以前に構築された可能性はあるが、構築と廃絶の年代は現在のところ不明である。 井戸掘り込み面の下層には粘土の整地層があり、その上面には河原石が数個据えられていた。その状況はA区と同様で、同時期の遺構と考えられる。調査区の北側で、この粘土の整地面から掘り込まれた土坑があり、中から鎌倉時代の軒瓦が出土した。したがって、この下層の遺構は、薬師寺の造営時期から、中世のある段階まで使用されていたものと考えられる。 ただし、A区、B区とも遺物は整理中であり、各遺構の正確な時期は、今後の整理をまって確定したい。 C区：南北 1.8m、東西 15mの調査を設定。現地表下 80 cmほどで瓦の廃棄土坑を検出。土坑は東西約 6 m、南北は 1.8mの範囲におよぶ。土坑からは多量の瓦は出土し、ほとんどは奈良時代の薬師寺創建時の瓦である。土坑の位置や出土品からみて、金堂で使用していた瓦であろう。土坑の瓦は、室町時代に金堂が大風で倒壊したときに破損した瓦とみられる。			
【実績値】 出土遺物：瓦 211 箱、土器 3 箱 記録作成数：実測図 6 枚、遺構写真(4×5) 20 枚			
【受託経費】 2,456 千円			

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	薬師寺旧境内の発掘調査（休ヶ岡八幡神社境内地）（受託）（(1)－⑤－ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 森川 実、渡邊晃宏、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）中村一郎・栗山雅夫（企画調整部）			
【年度実績概要】 本受託事業は、薬師寺休ヶ岡八幡宮境内における防災施設設置工事にともなう事前調査である。調査は現存する八幡宮社殿（重要文化財）を挟み、東西2箇所を実施した。それぞれを「東区」、「西区」と呼ぶ。東区は平成22年10月5日～11月2日、西区では平成22年12月1日～12月7日。調査面積は合計41㎡。			
【東 区】 休ヶ岡八幡宮社殿の東側では、管路に沿う南北方向に長い調査区を設け、発掘調査を開始した。防災設備（会所枡および放水銃）の設置予定位置で調査区を西へと拡張したところ、地山（白色シルトおよび橙色砂礫層）が八幡宮の社殿側（西側）で高く、東側へと急激に低くなることが判明した（写真）。この東落ちの段差は人為的に切り出されたものとみえ、地山の比高は最大で約1.5mにおよぶ。この段差を埋めている遺物包含層は「炭混土」・「灰色土」など都合8層以上に細分できる。「灰色土」やこれに挟在する間層は西側で高く、現地形を反映した堆積状況をみせる。また「灰色土」は、奈良時代前半の土師器・須恵器を多く含んでおり、整理箱で土器9箱、瓦多数が出土している。その内容は土師器杯A、杯C、皿A、高杯、盤、甕、薬壺や製塩土器、須恵器杯A・Bとその蓋、各種の壺、平瓶、甕などである。土師器杯・皿類には1段斜放射暗文＋連弧暗文を施した例が目立つ。墨書土器には土師器皿の外底部に「十」と記したものなどがある。このほか、細片であるが三彩片が出土している。全体に細片が多いものの、器種構成が明らかに奈良時代前半の土器群である。			
【西 区】 八幡宮社殿の西側では、社務所のすぐ南側で東西方向の狭長なトレンチを設定し、発掘調査をおこなった。表土直下で現代の土坑4基を検出したほかは、明確な遺構は皆無である。地山の傾斜は東区とは異なっており、東側（社殿側）が高く西側が低い。この傾斜は厚い整地層で埋められているが、整地をおこなった時期は特定できない。			
【まとめ】 東西両区で得た知見から、休ヶ岡八幡宮が地形上の高所に占地していることが判明した。また、東区で検出した段差の開削時期が、八幡宮の創建（9世紀末）以前に遡るのは確実である。			
			
東区 拡張区全景(東から)			
【実績値】 論文等数：2件（①・②） ①森川 実「薬師寺休ヶ岡八幡宮の調査」『奈文研ニュース』 ②森川 実ほか「薬師寺休ヶ岡八幡宮の発掘調査―第475次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定） 出土遺物：軒瓦61点、土器9箱 記録作成数：実測図（A2判）12枚、遺構写真（4×5）20枚			
【受託経費】 1,379千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8011

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 27-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	第一次大極殿院建造物復原整備にかかる調査委託(受託)((1)－⑥－ウ)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 井上和人(副所長)、深沢芳樹、小池伸彦、国武貞克、芝 康次郎、神野 恵、森川 実、城倉正祥、清野孝之、今井晃樹、中川あや、渡辺晃宏、馬場 基、浅野啓介、桑田訓也、箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡、井上麻香、北山夏希、山本 崇、青木 敬、小田裕樹、中村亜希子、黒坂貴裕、番 光、高橋智奈津(以上、都城発掘調査部)、小野健吉、吉川聡、島田敏男、清水重敦、平澤 毅(以上、文化遺産部)、大河内隆之、児島大輔、小澤 毅(以上、埋蔵文化財センター)、丹羽崇史(飛鳥資料館)、紅林孝彰、宮本隆行、田中康成(以上、研究支援推進部)、千田剛道(奈文研名誉研究員)、吉田 敏(山形県立米沢女子短期大学)			
【年度実績概要】 第一次大極殿院の奈良時代前期(I－2期)における様相を明らかにするため、文献資料、発掘遺構、出土遺物などの直接的資料の検討をはじめ、それに関わる類例の調査をおこなった。これらについての復原検討会および類例調査は以下のように開催し、復原に向けての資料の検討をおこなった。 [復原検討会] 第1回(2010/7/23)「全体計画と今後の検討事項」箱崎和久、「文献史料からみた大極殿院内の諸施設」渡辺晃宏「検出遺構の確認」大林潤、 第2回(2010/8/24)「平城宮の諸門と平城宮の寺院の門－重閣門をめぐる補考」渡辺晃宏 第3回(2010/9/10)「平安時代の大極殿儀一回廊の機能を中心として」山本崇、「第一次大極殿院の瓦①」中川あや 第4回(2010/10/6)「中国における大極殿院相当施設の様相」吉田 敏 第5回(2010/10/15)「発掘資料に見る大極殿院相当施設と南門・楼・回廊－高句麗・新羅・渤海・高麗」千田剛道 第6回(2010/10/25)「六国史にみえる9世紀以降の平安宮などの楼の史料－大射・騎射の施設について」渡辺晃宏、「中央区朝堂院の仮設建物と柵列－騎射の場」鈴木智大 第7回(2010/11/5)「第一次大極殿院回廊の標準断面」鈴木智大 第8回(2010/11/25)「第一次大極殿東西楼の復原案の推移」海野聡、「第一次大極殿院回廊内部・地形復原にかかわる検討課題」大林潤 第9回(2010/12/1)「渤海 上京龍泉府の宮殿遺構」井上和人、「大極殿院南門の上部構造検討史と今後の課題」箱崎和久 第10回(2010/12/22)「宮殿遺構の調査報告－第一次大極殿院相当施設の遺構」北山夏希、「第一次大極殿院東西楼事例研究の中間報告」井上麻香 第11回(2011/1/26)「「重閣門」の解釈について」「第一次大極殿院南門遺構の検討」箱崎和久 第12回(2011/2/10) 第13回(2011/2/25) 第14回(2011/3/10) [類例調査] 第1回(2010/10/9-11)弘前市・岩木山神社楼門および長勝寺三門にて楼造の類例調査 第2回(2010/11/8)京都市・京都御所および平安神宮にて宮殿建築、宮殿内庭部の類例調査 第3回(2010/11/13)甲府市・善光寺三門および慈眼寺鐘楼門にて楼造の類例調査 第4回(2010/12/10-13)中国・故宮および独楽寺観音閣にて宮殿建築、宮殿内庭部、楼造の類例調査			
【実績値】 「復原検討会とその成果－第一次大極殿院の復原研究1」『奈文研紀要2011』(予定) 「東西楼・南門の検討成果－第一次大極殿院の復原研究2」『奈文研紀要2011』(予定) 「大極殿院復原のための調査－第一次大極殿院の復原研究3」『奈文研紀要2011』(予定)			
【受託経費】 13,843 千円			



復原検討会風景(第3回)

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8012

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 28-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	初期洋風画の光学調査(受託)((2)-①)		
【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英
【スタッフ】 城野誠治、鳥光美佳子、江村知子(以上、企画情報部)、早川泰弘(保存修復科学センター)			
【年度実績概要】 本調査は、サントリー美術館が所蔵する重要文化財「泰西王侯騎馬図屏風」を対象として、同美術館からの受託調査研究として実施した。 この「泰西王侯騎馬図屏風」は八曲一双をなしたものの片隻に相当する。旧会津藩主松平家から個人の所有を経て、現在、サントリー美術館の所蔵となるものである。本図は、主題、モチーフ、短縮法や陰影法などに西洋風が認められる一方で、朱地に金箔を貼ることや、墨線による下描き、彩色顔料などには日本画の手法が駆使されており、和洋折衷の様式を示すものである。騎馬像の原画は、アムステルダムにおいて1606年頃に刊行されたウィレム・J・ブラウ世界地図を、1609年に改訂してできた大型世界地図の上部を飾った騎馬図に求められるという。それを17世紀初頭に拡大し独立させ、新に装飾性を加味して騎馬人物図に仕立て上げたものとされているが、今回の受託調査研究では、高精細デジタル画像撮影を行い、光学的に屏風の絵の作りの実態に迫ろうとするものである。 そのための基礎作業として、屏風各扇の本紙について、詳細に高精細デジタル画像撮影をすすめた。今年度の作品調査・撮影は8/23-27(5日間)、9/27-10/1(5日間)、10/26-28(3日間)の合計13日間に及んで実施した。			
【実績値】 調査日数：13日間 撮影枚数：カラー画像240枚、反射赤外画像269枚、透過赤外画像56枚、蛍光画像270枚			
【受託経費】 1,633千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8013

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 29-1

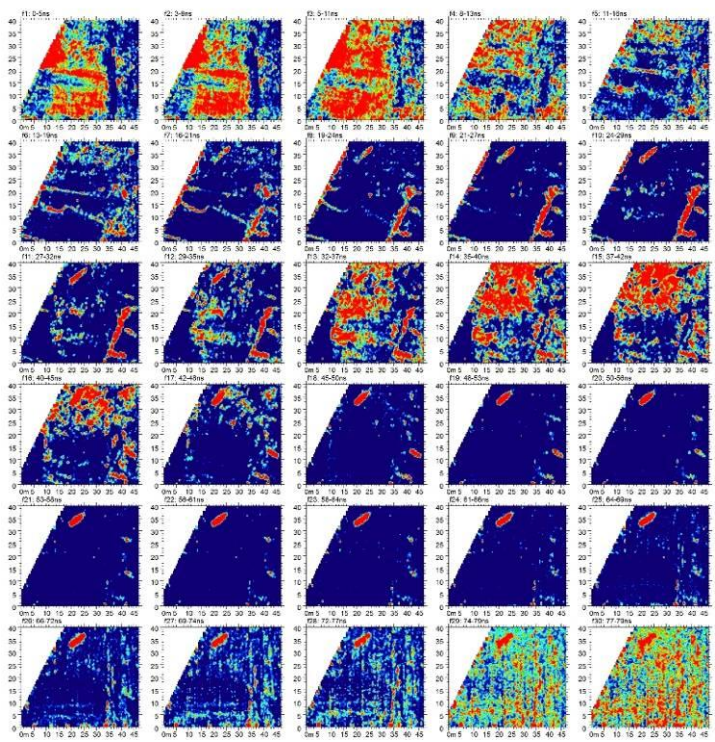
中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	GEMによる超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサー（受託）（(2)-②）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	主任研究員 犬塚将英
【スタッフ】			
【年度実績概要】 X線透過撮影により、文化財の内部構造を非破壊非接触で調べることができる。しかし、既存の器材では大型かつ高額であるために、移動が困難な文化財の現地調査が難しいのが現状である。特に、物質量が大きい塑像などの彫刻や建造物の内部構造を調査するためには高エネルギーのX線またはガンマ線を用いる必要がある。現地調査はさらに困難となる。本研究では光コンバータと信号読み出し基板を開発し、ガス電子増幅フォイルを用いた検出器に適用することにより、高エネルギーのX線またはガンマ線を用いた現地調査を目的とした開発を行っている。読み出し基板の製作及び試験は長崎総合科学大学と東京大学CNSが担当し、光コンバータの開発はサイエナジー株式会社が担当した。本年度は、これら別々に開発された各構成要素をひとつのシステムとして構築し評価実験を行った。評価実験に際しては、東京文化財研究所のX線撮影室にあるX線管球を用いてエネルギーが最大で320keVまでのX線を高い線量で照射することにより、超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサーの動作を試験し、性能を評価した。			
【実績値】 発表件数2件（①、②） ①超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサー（犬塚将英、房安貴弘、越牟田聡、田中義人、浜垣秀樹） 日本文化財科学会第27回大会 関西大学 10.06.26-27 ②GEMによる超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサーの開発と移動が困難な文化財の調査（房安貴弘、越牟田聡、浜垣秀樹、田中義人、犬塚将英）日本物理学会第66回年次大会 新潟大学 11.03.25-28			
【受託経費】 1,300千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所
業務実績書 (受託事業)

処理番号 8014

研究所 No. 31-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	天良七堂遺跡の総合的探査 (受託) ((2) -③-イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 金田明大 (主任研究員)、西村康、西口和彦 (以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 天良七堂遺跡は群馬県太田市に所在する古代の官衙遺跡であり、上野国新田郡衙に比定されている。近年、発掘調査が進められ、中心施設の構造や南面の区画施設が確認されている。当研究室では、昨年度に引き続き、今年度もこの遺跡についての探査を実施した。 昨年度の調査では、南側と北側の区画溝および総柱建物の存在を明らかにすることができた。本年度は追加調査として、東西および北側の境界となる区画施設の存在を推定することをおもな目的とした。 探査手法は地中レーダー (GPR) 探査に絞り、良好な信号を獲得できる走査方法を検討して探査をおこなった。この結果、溝の北西のコーナーとみられる部分を確定するとともに、正庁周辺の方形区画を限る溝の存在を推定することができた。 探査後におこなわれた発掘調査では、上記の推定の正しさが証明され、遺跡の範囲を確定することができた。 本調査は官衙における探査の成功例としてだけでなく、探査技術の向上という点でも重要な調査となった。			
			
区画溝北西コーナーの確認			
【実績値】 探査距離 : 19,500m 探査地点 : 8 地点 概要報告作成 : 1 件			
【受託経費】 1,596 千円			

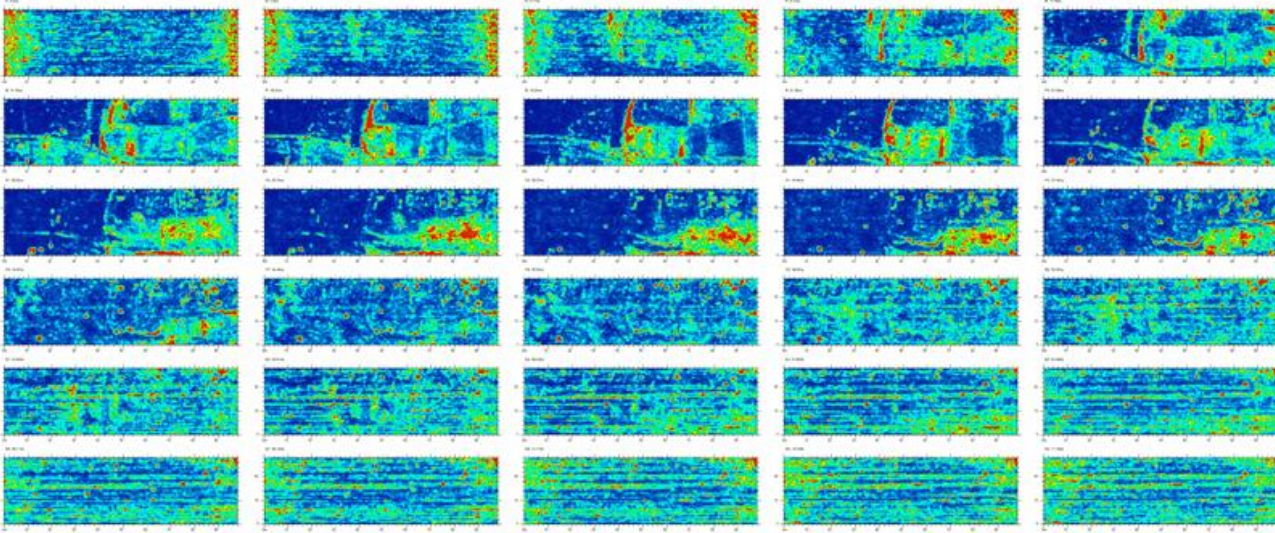
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8015

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 31-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	三軒屋遺跡総合的探査（受託）（(2)－③－イ）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】	金田明大（主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）		
【年度実績概要】	三軒家遺跡は群馬県伊勢崎市に所在する古代の官衙遺跡であり、上野国佐位郡衙に比定されている。近年、発掘調査が進められ、八面甲倉と史料に記載された八角形の倉庫跡など、中心施設の構造や南面の区画施設が確認されている。 しかし、西側および北側の境界となる区画施設の存在は未確認であった。そこで、遺跡の範囲を確定するために、遺跡探査と小規模な発掘調査を組み合わせる範囲確認をおこなうこととなり、遺跡周囲の探査の有効性の検討とあわせて、受託研究を実施した。 探査手法は地中レーダー探査に絞り、良好な信号を獲得できる走査方法を検討した。これをもとに探査をおこなったところ、西側と北側の区画溝の可能性のある異常部位の存在を明らかにすることができた。ただし、郡衙の区画施設の可能性があるものが複数確認されることから、今後、発掘調査などの手段を用いて、その詳細な性格と考古学的な情報の取得をおこなう必要がある。  深度別探査平面図（15 地点）		
【実績値】	探査距離：約 35,000m 探査地点：7 地点 概要報告作成：1 件		
【受託経費】	804 千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8016

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 31-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「発掘調査のてびき」作成に係る業務(受託)((2)－③)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】	井上和人(副所長)、金田明大(主任研究員)、山中敏史(客員研究員)ほか		
【年度実績概要】	『発掘調査の手引き』は昭和41年に文化庁文化財保護部から刊行され、数多く版を重ねてきたが、その後の発掘調査件数の急増と規模の増大、さらに調査技術と関連分野の研究の進展により、現状に応じた内容への改訂が求められるようになった。このため、文化庁文化財部記念物課の委託を受けて、奈良文化財研究所では、平成17年度から5年間にわたる全面的な改訂作業をおこない、平成22年3月にあらたな『発掘調査のてびき』を刊行することができた。 これらは、発掘件数の約7割を占める集落遺跡の発掘作業と、整理・報告書作成作業全般を対象としたものであり、文化庁は、本年度以降も、それ以外の遺跡を対象とする『発掘調査のてびき』の刊行に向けての作業を進めることを決定した。そして、奈良文化財研究所は、ひきつづき作成作業の事務局として、実務全般を担当することとなった。 本年度は、まず文化庁との打ち合わせを重ねて、基本的な枠組づくりをおこなったのち、9月に文化庁で作成検討委員会を開催した。委員会では、これまでの経緯と今後の計画について報告し、作業方針や内容に関する承認と指導・助言を受けた。そして、これにもとづき、12月(文化庁)と2月(奈良文化財研究所)に、作成検討委員会作業部会を開催した。作業部会では、文化庁文化財部記念物課の担当者と地方公共団体および大学等の委員、奈良文化財研究所委員が、「墳墓」「寺院・官衙」「生産遺跡」「城館」の4部会に分かれて、「てびき」の構成や内容、執筆分担等についての協議をおこなった。		
【実績値】	作成検討委員会作業部会開催件数：2回 作成検討委員会開催件数：1回 実績報告書：1件		
【受託経費】	990千円		

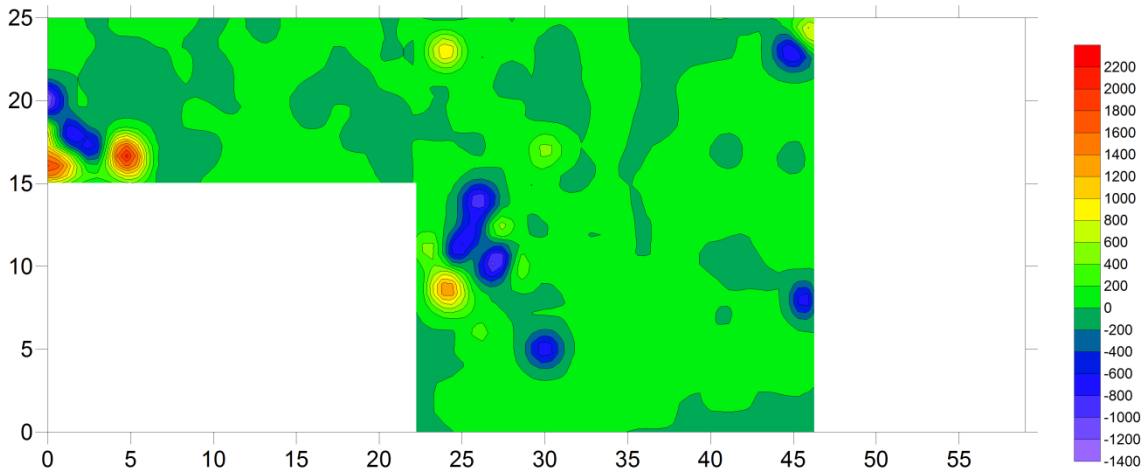
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8017

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 31-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成22年度大宰府史跡・蔵司地区における総合的探査業務(受託)((2)ー③ーイ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】	金田明大(主任研究員)、西村康、西口和彦(以上、客員研究員)		
【年度実績概要】	大宰府史跡は福岡県太宰府市に所在する古代の官衙遺跡である。政庁部分を中心に特別史跡に指定され、保存と活用が進められている。また、継続的な発掘調査が1968年以降おこなわれている。 今回の調査は、おもに政庁東側に所在する蔵司地区の遺構配置の状況とその性格の把握を目的として実施することとなった。また、それにくわえ、すでに市街地化が進行して発掘調査が難しい状況にある条坊内の運河と考えられる大溝の調査をおこなうこととした。 蔵司地区では、建物の可能性のある反射や、炉の痕跡をとらえることができた。一方、大溝については、市街地のため明瞭ではないが、溝の兩岸の可能性のある反射をとらえることができた。  蔵司地区における炉の痕跡(画面中央部)		
【実績値】	探査距離: 6,741m 探査地点: 5 地点 概要報告作成: 1 件		
【受託経費】	634 千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8018

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 32-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	永保寺開山堂の年輪年代調査（受託）（(2)－④）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	年代学研究室長 大河内隆之
【スタッフ】	廣岡とし（派遣職員）		
【年度実績概要】			
国宝永保寺（岐阜県多治見市）開山堂の屋根葺き替え修理工事に伴い、小屋や軒廻りを構成する部材を中心に、同堂の年輪年代調査を実施した。 調査に際しては、高解像度のデジタル一眼レフカメラを用いて各建築部材の年輪計測用画像を撮影し、当研究室においてデジタル画像を用いた年輪計測を行う方法を採用した。当該事業では3回（延べ8日）の現地調査を実施し、約20点の部材から年輪データを取得している。 永保寺は、正和二年（1313）に夢窓疎石と仏徳禅師らが同地を訪れ開創したと伝える中部地方随一の名利であり、同寺開山堂は詰組の禅宗様建築の代表例として現在国宝に指定されている。開山堂には仏徳禅師の墓所である宝篋印塔のほか、夢窓疎石像と仏徳禅師像が安置されており、寺伝によると観応二年／正和六年（1351）に夢窓疎石が没し、その翌年（1352）に足利尊氏によって建立されたという。 しかし、これまでの調査では、辺材を十分に残す複数の部材から1334年頃の年輪年代が得られており、1352年の建立とする寺伝には従い難い。むしろ、正慶元年／元弘二年（1332年）の仏徳禅師の入寂を契機として開山堂建立事業が始まったと考えられることを、これまでの年輪年代調査結果は示唆している。 同堂の屋根葺き替え修理工事は今年度で完了するが、同寺では引き続き観音堂の屋根葺き替え修理工事などが続く予定である。その期間内は開山堂調査のための足場の設営なども都合が付きやすい。永保寺開山堂のような典型的な詰組の禅宗様建築は多くの部材によって構成されており、年輪年代調査の対象となる良好な部材も多く遺されている。よって、今後も継続して調査することが望まれるが、幸い永保寺および修理工事関係者の了解も得られているので、屋根葺き替え修理工事完了後も、引き続き年輪年代調査にあたり、同堂建立の経緯について考究する年輪年代学的な調査成果を提供したい。			
			
永保寺開山堂の年輪年代調査風景			
【実績値】			
『永保寺開山堂の年輪年代調査に関する調査報告』（（財）文化財建造物保存技術協会・永保寺・多治見市教育委員会の関係者向けの調査報告書。次年度に屋根葺き替え修理工事予定の永保寺観音堂の調査成果とあわせて刊行予定）			
【受託経費】			
343 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8019

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 33-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進			
【事業名称】	東名遺跡出土動物遺存体調査 (受託) ((2) -⑤)			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長 松井章	
【スタッフ】 丸山真史 (客員研究員)				
【年度実績概要】 東名遺跡群では、平成 20 年度に発掘報告書が刊行された後も、掘り上げた第一、第二貝塚の貝塚土壌の水 洗選別作業を継続している。その選別作業で得られた魚類耳石は、これまで 80 個体にのぼるが、それらは大 部分が破損した破片で、完全な形のものはいくつか。それらの耳石を古生物学、特に魚類化石を専門とする大 江文雄氏に同定を依頼したところ、現在の有明海に生息するスズキ、メナダ、ボラ、クロダイ、コイチなど 代表種 5 種に加え、現在は生息しないニベ科 2 種を含む単純な魚種構成であることが判明した。 その特徴は、全個体数の 61% をスズキ科 (Percichthyidae) スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i> Cuvier、16% をボラ科 (Mugilidae) のメナダ <i>Liza haematocheila</i> (Temminck et Schlegel) が占めることである。両種で 77% となり、東名遺跡に居住した縄文早期人は、耳石から見る限り、この 2 種を集中的に漁労したことを明らか にできた。その他の種も、他の骨格部位では種名までの同定は不可能であった。 従来、遺跡出土魚類の同定は、顎骨関係、鰓蓋骨、咽 頭骨、棘などで行われてきたが、今回、大量の貝塚土壌 を水洗選別することによって耳石の採集が可能となり、 種の特徴が現れやすい耳石を用いたことで、種名レベル まで明らかにすることができた。メナダ、コイチなどは、 これまでの方法では同定例がない。動物考古学の新しい 可能性を示すことができたといえよう。				
				
		メナダ <i>Liza haematocheila</i> (Temminck et Schlegel) の耳石		
出土した耳石の種名一覧 (大江文雄による)				
魚 種	和名	個体数	%	摘 要
Percichthyidae(スズキ科)				
<i>Lateolabrax japonicus</i> Cuvier	スズキ	49	61.25	<i>Lateolabrax</i> sp., ? <i>Lateolabrax</i> sp.も含む
Mugilidae(ボラ科)				
<i>Liza haematocheila</i> (Tem. et Sch.)	メナダ	13	16.25	
<i>Mugil cephalus</i> Linnaeus	ボラ	2	2.5	
Sparidae(タイ科)				
<i>Acanthopagrus schlegelii</i> (Bleeker)	クロダイ	8	10	<i>Acanthopagrus</i> sp., ? <i>Acanthopagrus</i> sp.も含む
Sparidae gen. et sp. indet.	不明種	2	2.5	
Sciaenidae(ニベ科)				
<i>Nibea albiflora</i> (Richardson)	コイチ	4	5	
<i>Nibea mitsukurii</i> Jordan et Snyder	ニベ	1	1.25	
<i>Miichthys miiuy</i> (Bisilewsky)	ホンニベ	1	1.25	
合計		80	100	
【実績値】 耳石の同定個体数 : 80 個体				
【受託経費】 708 千円				

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8020

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 33-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	長割遺跡の動物遺存体調査(受託)((2)－⑤)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長 松井章
【スタッフ】 山崎健(研究員)、納屋内高史(京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)			
【年度実績概要】 新潟県長割遺跡では、縄文時代後期前葉主体の遺構や遺物包含層から白色の微細な焼骨片が多量に確認された。これらの骨片類を回収するために、遺構ごとに土壌を採取して、フルイによる選別作業を実施した。 出土資料は、すべて火を受けて白色化した焼骨の細片で、かなりの高温にさらされたものと考えられる。同定結果から、出土した魚類の生息環境を考慮すると、主に河川や湖沼などの淡水域に生息する種としてはサケ科、アユ、コイ科が、沿岸や沖合などの海水域に生息する種としてはタイ科、コチ科、ブリ属、板鰐亜綱(エイ・サメ類)、ニシン科が認められた。そのため、長割遺跡では淡水域から海水域までを漁場としており、出土量からみて、とくに河川でサケ科魚類を集中的に獲得していたと推測される。狩猟活動では、イノシシやニホンジカを主体として、ツキノワグマやタヌキも獲得していた。ほかに種同定が可能な資料は認められなかったが、鳥類の骨が出土していることから、鳥類も狩猟していたと推測される。 炉跡からの出土資料には、魚類が多く含まれていた。炉跡資料は、炉の使用時期と関連する可能性が高く、当時の食生活の一端が反映されたものと評価できる。また、袋状土坑の出土資料は、炉跡資料と類似した様相を示し、廃絶時に炉跡内の焼土を投棄したとみられる。一方、遺物包含層出土資料には哺乳類が非常に多く、古人骨を含むという特徴があり、葬制や儀礼に関わる資料が含まれている可能性が指摘できる。 長割遺跡から出土した動物遺存体や古人骨は、骨が焼けて無機化したために残りやすくなったものと考えられ、貝塚が少ない日本海側において非常に重要な資料である。焼骨の生成に関して多様な要因が想定されるため、生業だけでなく、葬制や儀礼など、縄文時代研究に寄与できる資料といえる。			
			
長割遺跡から出土したサケ科魚類 (上段：歯，下段：椎骨破片)			
【実績値】 同定資料数：573 点			
【受託経費】 338 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8021

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 33-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	六反田南遺跡Ⅳにおける動物遺存体の同定(受託)((2)－⑤)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長 松井章
【スタッフ】 山崎健(研究員)			
【年度実績概要】 六反田南遺跡は、新潟県糸魚川市に所在する縄文時代中期の低地集落である。新潟県埋蔵文化財調査事業団が実施した国道8号糸魚川東バイパス建設に伴う発掘調査により、縄文時代中期の遺物包含層から白色の微細な焼骨片や炭化種子が多量に確認された。 これらの骨片類や種実類を回収するためには、土壌を採取してフルイによる選別作業を実施する必要がある。そこで、奈良文化財研究所では1mm目までのフルイによる水洗フルイ選別法と0.25mm目のフローテーション法を実施し、微細遺物を回収した。合計4,564gの土壌を選別し、18.83gの骨片、503.33gの炭化材片、2.72gの種実類を回収した。なお、分析にあたっては、奈良文化財研究所だけでなく、新潟県埋蔵文化財調査事業団の土壌選別作業で回収された動物遺存体や植物遺存体も同定対象とした。 同定は現生骨格標本との比較により行い、比較標本には環境考古学研究室が所蔵する標本(NAC 標本)を用いた。同定や計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。その結果、動物遺存体は13,429点(433.55g)の資料が同定できた。哺乳類ではニホンジカ、イノシシ、ツキノワグマ、鳥類ではカモ科、キジ科、魚類ではサケ科、サメ類、タイ科などを確認した。とくにサケ科魚類が非常に多く出土しているのが特徴的である。種実類は169点を同定した。オニグルミ、カラスザンショウ、サンショウ属、ウコギ科などが多く出土している。			
 水洗フルイ選別選別法による土壌選別作業風景			
【実績値】 同定資料数：13,598 点			
【受託経費】 893 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8022

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 36-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国指定史跡高瀬石仏保存修理設計監理業務(受託)((3)-③)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 森井 順之(保存修復科学センター)			
【年度実績概要】 国指定史跡高瀬石仏(大分市)では仏龕天井部の剥離や表面の藍藻類繁茂などが保存上の問題となっている。管理者である大分市は「史跡・大分高瀬石仏調査委員会」を開催、委員により議論した結果、仏龕内の着生生物除去、剥落止め、覆屋の設置を保存修理事業で行うこととなり、それらの設計監理を東京文化財研究所で受託した。 諸般の事情により施工開始が10月中旬となったが、仏龕のある丘陵頂部の撥水・排水施工、紫外線殺菌灯を用いた仏龕内部の着生生物除去、仏龕表面の剥落止め、覆屋建設などにおいて、東京文化財研究所の指導・助言のもと3月までに終了した。			
			
		写真 丘陵頂部の雨水排水方法に関する協議	
【実績値】 受託研究報告書			
【受託経費】 1,691 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8023

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 36-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	霧島神宮における彩色剥落止めの手法開発及び施工監理（受託）（(3)-(3)）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 森井 順之、早川典子（以上、保存修復科学センター）			
【年度実績概要】 国指定重要文化財霧島神宮本殿の壁画および建築彩色を保存するにあたって、環境面からの保存対策、残存する壁画および建築彩色の状態調査、クリーニング、剥落止めの手法、材料に関する実験、助言、施工管理を受託した。 対象となる壁面が大きいので、全体の施工は3年度計画とし、今年度は、試験施工として4面の施工管理を行い、無事終了した。過去に用いられた修復材料の同定とその除去手法に関しても調査、実験を行い、その成果を施工に反映することができた。			
			
施工が完了し、顔料の剥落止めの終了した壁面			
【実績値】 受託研究報告書			
【受託経費】 575 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8024

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	田熊石畑遺跡武器形青銅器の保存修理及び保存台作製(受託)((3)－④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎(埋蔵文化財センター研究員)、田村朋美(埋蔵文化財センター研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)			
【年度実績概要】 福岡県宗像市の田熊石畑遺跡(弥生時代中期前半)において武器形青銅器 15 点が出土した。これらの武器形青銅器は、出土時点ですでに腐食が進行した状態にあり、取り上げにあたって著しい破損が懸念されたため、ガーゼや副木をアクリル樹脂で接着して応急的に補強が施された。奈良文化財研究所では、これらの武器形青銅器の保存修理を 2 ヶ年にわたり受託することになった。本年度はその初年度であり、7 点に対して保存修理をおこなった。 保存修理にあたって、肉眼観察、顕微鏡観察、X線ラジオグラフィならびに蛍光X線元素分析を実施したところ、これらの武器形青銅器は腐食がきわめて進行し、ブロック状の崩壊や刃部の粉状化を生じていることが明らかとなった。したがって、現状でのレプリカ作製のための型取りは極めて困難であること、固着した遺物を分離するために内部状況および固着状況を把握する必要があることから、高エネルギーX線CT装置による断層撮影をおこない、三次元画像を作成した。これらのX線CT画像からは、武器形青銅器の内部まで腐食が進行していること、遺物同士を固着しているのは粘土状の土であることなどが明らかとなった。 以上の事前調査から得られた劣化状態に関する知見をもとに、応急処置で施されたガーゼや副木の取り外し法、個々の遺物に適したクリーニング法、安定化および強化処置法を検討し、実行に移した。その際、接合可能な破片はアクリル樹脂による接着をおこない、変形を生じているものは無理に接合しないという方針をとった。欠損部分については、取扱い時に引っかかることによる破損を防ぐための必要最低限の充填にとどめた。 以上の事前調査と保存修理の結果、本年度搬入した武器形青銅器を安定した状態にすることができた。			
【実績値】 保存修理：武器形青銅器 7 点 報告書作成：1 件			
【受託経費】 4,998 千円			



取り上げ時の応急処置に際して接着されたガーゼの除去作業

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8025

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	宇治橋擬宝珠成分分析 (受託) ((3) -④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎 (保存修復科学研究室研究員)、田村朋美 (保存修復科学研究室研究員)、降幡順子 (都城発掘調査部主任研究員)			
【年度実績概要】 伊勢神宮の宇治橋は、遷宮と同様、20 年ごとに架け替えがおこなわれている。その欄干には、現在、最も古いもので慶長から、新しいもので寛文銘の擬宝珠が取り付けられている。しかしながら、そうした紀年銘と実際の製作年が一致するかどうかは定かではない。日本において現存する欄干の擬宝珠で最古とされているのは、京都市鴨川に架かる三条大橋の擬宝珠である。宇治橋の擬宝珠の製作年がその紀年銘のとおりであるならば、三条大橋のものよりも古いということになる。そこで、製作年代についての知見を得るため、宇治橋に取り付けられている擬宝珠の成分組成を調査した。 擬宝珠の元素組成は、基本的に、主成分として銅、スズおよび鉛からなっている。亜鉛は検出されなかった。また、慶長、明応および寛文銘の擬宝珠からサンプリングして精密化学分析をおこなったが、若干の組成比の違いはあるものの、年代などを反映するような結果は得られなかった。			
			
宇治橋擬宝珠の蛍光X線元素分析			
【実績値】 分析点数：宇治橋（現地）に取り付けられた擬宝珠 16 点、収蔵庫保管擬宝珠等 6 点 報告書作成：1 件			
【受託経費】 696 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8026

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	埋蔵文化財発掘調査に係る青銅器科学分析業務委託(受託)((3)－④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 協谷草一郎(埋蔵文化財センター研究員)、田村朋美(埋蔵文化財センター研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)			
【年度実績概要】 弥生時代中期の遺跡である長野県中野市柳沢遺跡より銅戈8点ならびに銅鐸5点が出土した。長野県内における初めての銅戈出土例である。また、出土した銅戈のうち1号銅戈は、その型式から九州型であるとされるが、東日本で九州型銅戈が出土したのは初めてのこととなる。 平成20年度と平成21年度におこなった受託事業では、保存修理とそれに先立つ事前調査をおこなったが、本年度は、銅戈5点(4～8号)および銅鐸2点(1・2号)について科学分析業務を実施した。調査内容は、X線ラジオグラフィによる内部構造調査、遺物表面の肉眼観察および顕微鏡観察、蛍光X線元素分析ならびにサンプリング法によるICP発光分析である。 X線ラジオグラフィの結果、肉眼観察では比較的劣化していないと思われた銅戈にも細かな亀裂が存在すること、銅鐸はかなり腐食が進行していることが明らかとなった。遺物表面の肉眼観察と顕微鏡観察では、銅戈表面にきわめて細かな亀裂が観察されること、銅鐸表面では腐食が進行し、酸化銅、塩基性炭酸銅および酸化錫などのサビ層が皮殻状に形成されていることが把握できた。蛍光X線元素分析およびICP発光分析の結果からは、今回分析した銅戈の成分組成は、前回および前々回の受託事業において分析した大阪湾型とされる銅戈と類似し、九州型とされる1号銅戈とはスズの含有率が高いという点で異なることが判明した。また、銅鐸については、前回分析した銅鐸と同様、九州型の銅戈と類似した成分組成であることがわかった。2～7号銅戈では腐食があまり進行していないのに対し、1号銅戈と銅鐸は腐食が進行しているという状況にも共通性が認められる。 以上の科学分析の結果から、柳沢遺跡出土の4～8号銅戈ならびに1・2号銅鐸について、その劣化状況を詳細に把握し、保存処理に対して有用な知見を提示することができた。			
【実績値】 分析点数：銅戈5点および銅鐸2点 報告書作成：1件			
【受託経費】 1,283千円			



銅鐸の精密分析のためのサンプリング

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8027

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	土壌水分の蒸発による史跡ガランドヤ古墳石室内環境の変化に関する調査（受託）((3)－④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎(埋蔵文化財センター研究員)、田村朋美(埋蔵文化財センター研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)			
【年度実績概要】 大分県日田市に所在する史跡ガランドヤ古墳は、玄室奥壁などに赤色や緑色の顔料で装飾が施されている。これらの石材表面には、石材の劣化によると思われる石材表面の剥離が生じており、装飾の保存が危ぶまれている。 このような劣化を引き起こす要因として、石材表面における乾湿の繰り返しが挙げられる。すなわち、石室周辺の土壌から蒸発した水が石材表面で結露して石材の濡れを引き起こし、さらに石室内大気温度あるいは石材表面温度の上昇に伴い、再び蒸発することを繰り返していると推定される。このような状況に陥る原因としては、次の2点が挙げられる。 1) 石室周辺土壌の含水率が比較的高い。2) 石室の断熱性が乏しいため、石室石材および石室内大気温度変化が大きい。 ガランドヤ古墳が位置する段丘は地下水位が比較的深く、石室周辺土壌の水分量に影響をおよぼすものは雨水のみであることが、以前に実施した環境調査から判明している。そこで本研究では、遮水性の墳丘の復元を想定した覆屋を設置して、周辺土壌への雨水の浸透を抑制し、石室周辺土壌の含水率の低下を促進させた。そして、石室周辺土壌の含水率の低下に伴い、石室石材表面での結露が抑制できるのか、検討をおこなった。 調査の結果、石室周辺および石室床面の土壌含水率は低い値で安定しており、土壌が乾燥した環境を作り出すのは可能であることが確認された。 今回の調査では、断熱性をもつ覆屋を設置することはできなかったため、上記2)については今後継続して検討する必要があると考える。			
			
石室に設置した覆屋と気象観測装置			
【実績値】 報告書作成：1件			
【受託経費】 2,670 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8028

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 43-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務（受託）（(4)-①）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英、川野邊 渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）、間渕 創、坪倉早智子（以上、客員研究員）			
【年度実績概要】 昨年度に引き続き、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天2の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を完了した。また完成した、図面の点検も引き続き行っている。天1・東男子・青龍・西女子については常温抽出布海苔にて脆弱化した漆喰層の1度目の強化を行った。これにより一昨年度前より行っていた1度目の強化作業は全石終了した。天2はクリーニング後に精製布海苔による2回目の漆喰層強化を行っている。 また、より適切な処置方法を検討するために、模擬漆喰を用いた実験を行い、作業道具の作成・改良も行った。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。 平成のカビの発生の発端となった2001年の分離株を含む重要な菌株約450株についてアンプルの生育確認、メンテナンスを実施している。 古墳壁画仮修復施設においては、ひきつづきムカデ、クモなどのモニタリングのためのトラップ調査を実施し、必要に応じて物理的な侵入防止対策など講じた。施設内の環境中の浮遊菌調査についても8月と2月に調査を実施し清浄な環境であることを確認した。 石室の石材間に使用されていた目地漆喰について、アミノ酸、糖、脂肪酸などの含有量を定量し、どの程度の有機物が目地漆喰に含まれていたかについて詳細調査を行った。			
【実績値】			
【受託経費】 45,608 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8029

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 43-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査（受託）（(4)-①）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、川野邊 渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）、間瀬 創、坪倉早智子（以上、客員研究員）			
【年度実績概要】 4月12日～4月30日、5月10日～5月28日、10月12日～10月29日、11月8日～11月25日の4期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。集中取り外し期間中で作業のない土曜日・日曜日、及び取り外し期間外は石室内に紫外線灯を設置し、週に1回のカビ点検を行っている。 これまでに取り外した漆喰片については随時経過観察と処置を行い、「朱雀」については平成22年5月の公開のための額装を完成させた。また、昨年度までに剥ぎ取った天文図漆喰片の適切な処置方法の検討、漆喰上の泥の処置のための実験を行っている。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。 石室内の微生物の調査を5月、10月に実施し、おもに間欠的な紫外線照射でカビなどの被害を防止している環境において従来と比較して菌類や細菌などの微生物相に変化がみられるかどうかについて調査した。目視ではほとんど被害はみられなかったが、培養すると微生物は検出され、分離された微生物の種類は、昨年までとあまり変化はなかった。 壁画の修復材料として使用されている樹脂などの材料について、本年度は、酵母や細菌などによる資化性（栄養源として利用できるかどうか）について調査した。その結果、細菌などによって、一部の材料は資化される場合があることがわかった。 施設内の除菌清掃を実施した。また、小前室についても、カビなどが生えにくくなるよう、樹脂施工メンテナンスを実施した。 キトラ古墳から2004年以降分離された菌株約260株についてアンプルの生育確認、メンテナンスを実施した。			
【実績値】			
【受託経費】 43,031千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8030

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 44-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務(受託)((4)-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、玉田芳英、若杉智宏、石田由紀子〔以上、都城発掘調査部(飛鳥藤原地区)〕、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美〔以上、埋蔵文化財センター〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田愛〔以上、企画調整部〕、肥塚隆保〔客員研究員〕、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東文研)、青柳泰介、岡林孝作(奈良県立橿原考古学研究所)、水野敏典(奈良県教育委員会)、相原嘉之(明日香村教育委員会)			
【年度実績概要】 平成 21 年度に引き続き、平成 18 年・19 年度に実施した石室解体事業に係る発掘調査の成果、出土資料・記録類の整理作業、石室石材の修理と安全な拘束の実施、安置法の検討、壁画の保存修復(劣化原因)に関する分析調査を進めた。 『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』資料編:発掘調査(原案)を執筆、編集し、文化庁へ提出した。さらに、石室石材の細部三次元計測、発掘調査 3D 計測による石室解体事業の CG 動画作成、発掘調査および解体作業中に撮影した記録映像の編集作業、遺構図のデジタルトレース作業、石室石材上に残存する朱線の材質分析、版築土の粒度分析調査などを実施した。 石室石材の修理としては、石室石材の接合・補填法の検討、安定台の改良製作(天井石 1、2)ならびに天井石 3 の亀裂部側面支持サポートの製作をおこなった。 壁画の保存修復に関する分析調査としては、今後の経年変化の基礎データとして用いるために、改造したデジタルアーカイブスキャナを使用して、壁画面(4 面)の高精細データならびに赤外線画像も取得した。また、紫外線画像を撮影するための開発実験をおこない、紫外線画像の取得も可能な状態とした。 劣化原因調査および修復のための継続的な材料調査として、壁面上での分析時に利用する機器固定ステージの改良をおこない、蛍光 X 線分析(西壁 3、閉塞石)、可視分光分析、近赤外分光分析、テラヘルツ分光イメージングを実施し、鉛の面的な分布状況や表面の観察、漆喰の断面方向の調査を実施した。 漆喰の分析調査では目地漆喰の微量成分分析、偏光顕微鏡観察、電子顕微鏡観察をおこなった。 以上の作業を踏まえて、『国宝高松塚古墳壁画高級保存対策事業報告書』資料編の執筆、編集を行った。			
			
天井石 3 の亀裂部側面支持サポート			
【実績値】 論文等数 2 件(①～②) ①肥塚隆保他「高松塚古墳壁画の材料調査」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6 ②肥塚隆保他「材料調査の概要」『月刊文化財』第 563 号 2010.8 研究発表件数 3 件(③～⑤) ③肥塚隆保他「国宝高松塚古墳壁画の材料調査―目地漆喰および下地漆喰―」日本文化財科学会、2010.6 ④高妻洋成他「ミリ波およびテラヘルツ波の文化財への応用 I ―層構造調査へのテラヘルツ波イメージング技法の基礎研究―」日本文化財科学会、2010.6 ⑤降幡順子他「高松塚古墳壁画の材料調査―蛍光 X 線分析法による下地漆喰に関する調査(2)―」日本文化財科学会、2010.6			
【受託経費】 67,992 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8031

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 44-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（受託）（(4)-①）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】	玉田芳英、若杉智宏、高橋 透、木村理恵、降幡順子、〔以上、都城発掘調査部〕、井上直夫、中村一郎、栗山雅夫、岡田愛〔以上、企画調整部〕		
【年度実績概要】	都城発掘調査部では、特別史跡キトラ古墳より出土し、保存処理の終了した遺物の管理・保管環境について継続的に調査・記録をおこなった。非常に脆弱遺物な遺物などは処理後にも定期的に状態観察などをおこなう必要がある。このため、琥珀玉や微細な金属片などの遺物については点検を実施し、密閉用特殊フィルムおよび脱酸素剤の交換などをおこなった。 展示活用としては、キトラ古墳壁画のハイビジョン 3DCG ナレーションの吹き込み作業（英語・韓国語・中国語）をショートバージョンについて、ロングバージョンの吹き込み作業（日本語、英語、韓国語、中国語）を実施した。またショートバージョンはブルーレイディスクプレス作業およびフォトマップ資料の印刷製本を実施した。さらに壁画面の漆喰が石材からどの程度浮いているのかを画像中で定点を指定すると計算・表示できるコンテンツを作成した。 今後予定されているキトラ古墳墳丘の整備に関しては、標高値の記載された遺構編集図を作成した。また実際の整備案を参考とするため、墳丘の復元に関する検討会を 2 回開催し、復元案を作成した。		
 キトラ古墳壁画 2004 ブルーレイハイビジョンディスク			
【実績値】	論文等数 1 件（①） ① 降幡順子・佐藤昌憲「キトラ古墳出土琥珀玉の保存処理」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010. 6 制作物 4 件（②～⑤） ②奈良文化財研究所「ブルーレイハイビジョンディスク キトラ古墳壁画 2004」ショートバージョン（英語、韓国語、中国語版） 2011. 3 ③奈良文化財研究所「ブルーレイハイビジョンディスク キトラ古墳壁画 2004」ロングバージョン（日本語版、英語、韓国語、中国語版）2011. 3 ④奈良文化財研究所「キトラ古墳壁画 フォトマップ資料 奈良文化財研究所史料 86 冊」2011. 3 ⑤奈良文化財研究所「キトラ古墳壁画高低座標系分布の計算・表示コンテンツ」 2011. 3		
【受託経費】	45,372 千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8032

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 45-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査(受託)((4)-②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 石田由紀子、森先一貴、石橋茂登、若杉智宏、高橋 透、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、2008 年の試掘調査および 2009 年度の発掘調査の成果をもとに、檜隈寺北方の丘陵頂部から西側斜面にかけて 2 カ所(1 区・2 区)、丘陵部東側斜面裾部に 5 カ所の試掘坑を設け、発掘調査を実施した。調査期間は 2010 年 8 月 24 日～2010 年 12 月 27 日。調査面積は、計 655 m ² である。 講堂の北方約 50m に位置する 1 区では、後世の削平が著しかったものの、素掘溝 2 条、瓦組暗渠 1 基、谷 1 条を検出した。瓦組暗渠は 7 世紀後半の檜隈寺創建瓦を用いており、先端部のみ残存する。調査区南西部で検出した北西に入り込む谷筋の谷頭部分に暗渠を設置し、排水していたものと思われる。また、調査区西半では、平安時代以降の大規模な整地を確認した。 2 区では、素掘溝 2 条、沼状堆積層、およびその下層から 7 世紀前半に位置づけられる土坑を 1 基確認した。2 区では大規模な整地層を確認しており、整地層に含まれる遺物から 7 世紀前半、7 世紀末～8 世紀初頭、8 世紀後半にかけて断続的に大規模な整地をおこなっていることを層位的に確認した。 また、丘陵東側斜面裾部に設置した試掘坑では、人頭大の石を用いた石敷を確認しており、土器の年代からも 6 世紀末から 7 世紀までのものと考えられる。 今年度の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した 7 世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点の多かった 7 世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺に関する重要な資料を得ることができた。			
			
1 区出土瓦組暗渠 北から			
【実績値】 論文等数 2 件(論文 1 件①、その他 1 件②) ①石田由紀子・石橋茂登・高橋透「檜隈寺周辺の調査―飛鳥藤原第 164 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6(予定) ②石田由紀子「檜隈寺周辺の調査(飛鳥藤原 164 次)」『奈文研ニュース No.39』2010. 12 出土遺物 軒丸瓦 25 点、軒平瓦 26 点、丸瓦 2630 点(380.0 kg)、平瓦 9325 点(762.5 kg) 土器 15 箱、鉄製品 3 点、鉄片 1 点、鉄釘 2 点、銭貨 1 点、鉄滓 14 点 羽口 4 点、種子 2 点、加工木 1 点、自然木 1 点 記録作成数 遺構実測図 50 枚、写真(4×5) 136 枚			
【受託経費】 9,329 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8033

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 49-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業 カンボジア(受託)((1)ー②ーア)		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	国際遺跡研究室長 杉山 洋
【スタッフ】 石村智、田代亜希子(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 今年度は現地調査2回と日本での研究会1回を行った。研修事業としては、現地での研修活動を2回、大学における講義を1回行った 現地調査第1回目は2010年11月27日から12月4日に行った。プノンペン王立芸術大学の研修生7名と芸術文化省から2名が参加し、クラン・コー遺跡の2地点に調査区を設定し、計3トレンチで発掘調査を行った。第6地点第2トレンチでは、火葬に伴うレンガ状の遺構を検出した。あわせて物理探査を行い、遺構の有無を確認した。 現地調査第2回目は2011年2月16日から2月21日に、同じくクラン・コー遺跡で行った。2地点に各1トレンチを設定し発掘調査を行った。第4地点第2トレンチでは木簡墓2基を発見し、そのうちの1基では木棺の痕跡を検出した。 研修活動としては、まず第1回目の現地調査に合わせて、プノンペンの王立芸術大学で考古物理探査の講義を行った。講義だけでなく上記の現地調査の折に、プノンペン王立芸術大学考古学部の卒業生7名を現地へ帯同し、現場において探査実習を行った。第2回目の現地調査においては、出土遺物整理手法の研修として、遺物実測と写真撮影の研修を行った。 研究会は、2011年3月25日に研究所飛鳥資料館で開催した。カンボジアから本事業の相手方である文化芸術省官房長ウク・ソチアット氏以下4名を招聘し、本年度の調査研修成果の情報共有と、今後の事業展開についての討議を行った。			
 現地における探査実習 大学における講義風景			
【実績値】 現地調査 2回：11月 1回、2月 1回 現地実習 2回：11月 1回、2月 1回 研究会 1回：3月			
【受託経費】 5,000 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8034

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 52-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ／日本信託基金 バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト (受託) ((1)-②-ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 清水真一、山内和也、有村 誠、影山悦子、邊牟木尚美、島津美子、鈴木 環、安倍雅史 (以上、文化遺産国際協力センター)、前田耕作、谷口陽子、松岡秋子 (以上、客員研究員)、井上和人、森本 晋、石村 智、脇谷草一郎、田村朋美、田代亜紀子 (以上、奈良文化財研究所)			
【年度実績概要】 文化遺産国際協力センターは、2004 年より、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるバーミヤーン遺跡保存事業に参画し、バーミヤーンの文化遺産保護のために様々な活動を行ってきた。本年度は、バーミヤーン遺跡保存事業第 10 次ミッションを実施し、日本国内においてアフガニスタンの考古学専門家の人材育成・技術移転を行った。 ①バーミヤーン遺跡保存事業の実施 7/9～7/30 にかけて、アフガニスタンのバーミヤーン遺跡において、アフガニスタン情報文化省と共同で「バーミヤーン遺跡保存事業」第 10 次ミッションを実施した。第 10 次ミッションでは、1) 東大仏龕の西側に隣接する C(a) 窟、C(b) 窟、D 窟、D1 窟の壁画の状態調査と応急的な保存修復処置、2) 第 6 次、第 7 次、第 8 次ミッションで実施した N(a) 窟と I 窟における壁画の保存修復処置の経過観察、3) 来年度以降の発掘調査候補地の視察、4) 第 8 次ミッションまでの考古学調査で得られた考古遺物の整理、などを実施した。全ての現地での活動は、アフガニスタン専門家と共同で実施することで、現地専門家の人材育成・技術移転も達成することができた。 ②考古学専門家の人材育成・技術移転 アフガニスタン考古学研究所よりアフガニスタン人専門家 2 名を招へいし、2 つの研修を行った。第 1 は、若手研究者を対象とした考古学研修で、8/2～12/17 の日程で、東京文化財研究所、静岡県埋蔵文化財調査研究所、奈良文化財研究所の 3 機関で連携して実施した。研修では、フィールド調査に必要な発掘、測量の方法や最新の機器の使用法、また発掘後の室内作業として、遺物の実測、拓本、インクトレースによる製図などが指導された。それぞれの機関で、共通した研修内容を繰り返し指導することができたので、研修生の研修内容に対する理解と習熟度は高かった。研修の最後には、アフガニスタンの考古学事情や研修内容を発表する報告会「アフガニスタン人考古学専門家による研修成果発表会」を実施した。 第 2 は、シニア研究者を対象とした研修で、9/27～10/15 の日程で、東京文化財研究所と奈良文化財研究所が連携して行った。この研修は、遺跡の発掘調査後の遺跡の公開・管理の方法を学ぶことを目的としたもので、さまざまな史跡整備の方法やサイト・ミュージアムにおける展示の方法などを実見するために関東や近畿の史跡公園や博物館を訪れて研修を行った。			
【実績値】 報告会：「アフガニスタン人考古学専門家による研修成果発表会」(08. 12. 17) 報告書：『バーミヤーン遺跡保存事業概報-2009・2010 年度 (第 9・10 次ミッション) -』			
【受託経費】 98,000USD (間接経費 15%含む)			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8035

業務実績書 (受託事業)

研究所 No. 53-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援 (専門家交流) 事業 (受託) ((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 清水真一
【スタッフ】 亀井伸雄 (東京文化財研究所・所長)、秋枝ユミイザベル (文化遺産国際協力センター)、岡村知明 (同・客員研究員)、康 成源 (同・来訪研究員)、田代亜紀子 (奈良文化財研究所)、武内正和 (文化庁)、渡邊 泰 (塩尻市)、布野修二 (滋賀県立大学)、牧 紀男 (京都大学)、脇田祥尚 (近畿大学)、竹内 泰 (宮城大学)、有 友至、中島郁子 (以上、国立公文書館)、菅原由美 (大阪大学)			
【年度実績概要】 本事業は、2009 年 9 月 30 日に発生した西スマトラ州地震において被災したインドネシア共和国西スマトラ州パダンの文化遺産の復興を支援することを目的としている。事業は、2009 年にインドネシア政府およびユネスコの要請のもとで同研究所が行った調査成果をもとに、現在も復興の過程にあるパダンの歴史的建造物および町並み、そして被災した文字文化財の保存修復に関して、日本人専門家を派遣しワークショップを開催することで、その復興を支援することを目的としたものである。また、関係分野のインドネシア専門家を日本に招へいし、日本が蓄積してきた歴史的建造物および町並みに対する耐震、防災技術、また文字文化財の修復技術についての技術交流を行った。 平成 22 年度に実施された本事業は、歴史的建造物・町並みおよび文字文化財の 2 班に分かれておこなわれた。それぞれにおいて、現地の状況調査、ワークショップ、日本への専門家招へいを行った。			
 [建造物・町並み] 現地調査、ワークショップ、招へい [文字文化財] 現地調査、日本招へい			
【実績値】 [文字文化財] 現地状況調査およびワークショップ：2010 年 11 月 20 日ー28 日 日本への専門家招へい：2011 年 1 月 25 日ー2 月 2 日 報告書『西スマトラ州パダンにおける文字文化財復興支援』 [建造物・町並み] 現地状況調査：2010 年 10 月 15 日ー25 日 ワークショップ：2010 年 12 月 11 日ー17 日、2011 年 1 月 1 日ー10 日 日本への専門家招へい：2011 年 2 月 7 日ー13 日 報告書『西スマトラ州パダンにおける歴史的建造物および町並み復興支援』			
【受託経費】 15,000 千円			

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業 (受託) ((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 清水真一
【スタッフ】 田代亜紀子 (特別研究員)、原本知実、原田 怜 (以上、特別研究員 (アソシエイトフェロー))、土居香菜子、中山仁美 (以上、事務補佐員)、小角由子、(研究補佐員)、佐藤 桂、岡村友明 (以上客員研究員)			
【年度実績概要】 文化遺産国際協力に係わる諸課題について議論するための分科会を計 13 回、専門家会合を計 1 回開催すると共に、会員間の情報共有を促進するための場として研究会を 2 回、講演会を 1 回開催した。コンソーシアム活動を広報するために、5 月には、一般市民向けの公開シンポジウムを行ったほか、コンソーシアムパンフレット及び国際協力事業を紹介する冊子の作成、公式ウェブサイトのデータ追加・改修を行った。さらに、協力相手国調査としてアルメニアとミクロネシアにて調査を実施した。また、四カ国 (フランス、イタリア、オランダ、米国) を対象に被災文化遺産の復旧に係る調査を実施した。			
I. コンソーシアムの企画・運営 1. 運営委員会を 2 回開催し活動方針等を協議したほか、3 月には講演会と併せて総会を開催した。2. 企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会を計 13 回開催した。3. 文化遺産情報共有化ワーキンググループでは、文化遺産情報共有化システム構築にむけての活動を同志社大学文化遺産研究科学センターによる再委託事業を中心に行った。事業報告及び研究成果を研究会で発表し、文化遺産情報共有化ワーキンググループは終了とした。4. 広域ワーキンググループを設置し、欧州、アフリカ、中東をカバーする分科会の立ち上げの是非について検討した。5. プリア・ヴィヒアに関する勉強会を 1 回開催した。6. 広報活動のため、事業紹介冊子の作成、一般向けウェブサイトのデータ追加、及びウェブサイト機能の向上のための改修を行った。			
II. 情報共有と情報発信 1. 国際シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎 (いしずえ) をつくる」を開催した。2. 研究会「アンコール遺跡に対する国際協力と情報管理—情報資源共有化の課題と展望—」、「文化遺産保護の国際動向」を開催した。・講演会として「欧州における遺産—非政府的視点から」を開催した。3. 報告書『平成 22 年度協力相手国調査 ブータン』をまとめた。4. 報告書『被災文化遺産復旧に係る報告書—支援実施国編』をまとめた。5. 報告書『第 6 回研究会遺跡の情報発信と地域への還元』をまとめた。6. 報告書『文化遺産保護は平和の礎をつくる』をまとめた。			
III. 文化遺産国際協力に関すること 1. 被災文化遺産の復旧に係る調査として、フランス、イタリア、オランダ、米国を対象に調査を行い、報告書をまとめた。2. 日本によるモンゴル国への国際協力事業の支援調整を行った。3. 協力相手国調査としてアルメニアとミクロネシアにて調査を実施した。			
【実績値】 運営委員会の開催：2 回、総会の開催：1 回、国際シンポジウムの開催：1 回、分科会の開催：企画分科会 4 回、東南アジア分科会 3 回、西アジア分科会 3 回、東・中央アジア分科会 3 回) 合計 13 回、専門家会議の開催：合計 1 回、特別講演会開催 1 回、研究会の開催 2 回、諸国国際協力体制調査：アルメニアの文化遺産国際協力状況調査、ミクロネシアの文化遺産国際協力状況調査、被災文化遺産の復旧に係る調査実施数：4 カ国 (フランス、イタリア、オランダ、米国) (成果物ドキュメント名)①『平成 22 年度協力相手国調査 ブータン』(2011 年 3 月、500 部) ②『平成 22 年度協力相手国調査 ブータン 英語』(2011 年 3 月、130 部) ③『被災文化遺産復旧に係る報告書—支援実施国編』(2011 年 3 月、500 部) ④『被災文化遺産復旧に係る報告書—支援実施国編 英語』(2011 年 3 月、500 部) ⑤『第 6 回研究会遺跡の情報発信と地域への還元』(2011 年 3 月、120 部) ⑥『文化遺産保護は平和の礎をつくる』予稿集 (2010 年 5 月、430 部) ⑦『文化遺産保護は平和の礎をつくる』(2011 年 3 月、430 部) ⑧「文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット」(2010 年 5 月 1000 部、12 月 7000 部) ⑨「文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット英語」(2010 年 5 月 400 部、7 月 1000 部) ⑩「文化遺産国際協力事業紹介」(2011 年 3 月、275 部) ⑪「文化遺産国際協力事業紹介英語」(2011 年 3 月、275 部)			
【受託経費】 60,126 千円			



国際シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎をつくる」

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8037

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 53-3

中期計画の項目	5 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業 インド(受託)((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 鈴木 環、島津美子(以上、文化遺産国際協力センター)、谷口陽子(客員研究員、筑波大学)、福山泰子(中部大学)、早川廣行(株式会社電画)、米澤 宏(写真家)、土田 勝(日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所)、樋上将之、渡辺真樹子、ステファニー・ボガン(以上、保存修復家)、中村土光、林田康一(以上、東京藝術大学)			
【年度実績概要】 「東京文化財研究所とインド考古局との壁画保存に関する拠点交流事業」の枠組みにおいて、古代仏教壁画が豊富に残るインド・アジャンター石窟を対象に、壁画の保存修復のための調査・研究を行い、保存修復材料および技術に関する知識、専門的技術および経験を日本-インド間で共有し、人材育成・技術移転を図る。 <u>1. 日本におけるインド人保存修復専門家の人材育成</u> 7月28日～8月4日にかけて、インド考古局の若手専門家1名を日本に招聘し、アジャンター壁画の保存に関する成果発表を行った。国内の研究所等では、壁画保存に有効な科学分析手法と機器の使用に関する研修を実施し、将来的な保存修復を担う若手専門家の人材の育成を行った。 <u>2. 壁画の高精細写真記録(第4次ミッション)</u> 9月8日～10月2日にかけて第4次ミッションを実施した。インド考古局の専門家と共同で第9窟壁画の写真記録を行い、デジタルドキュメンテーションに関する専門的知識・技術の交換を行った。 アジャンター石窟では膨大に残る壁画の記録作業が課題とされていたが、昨年度、高精細デジタルカメラを使用し、第2窟壁画の全体図から細部の状態までを判別しうる高精細記録に成功し、インド考古局の専門家にとって初の経験となった。本年度は、遺跡の多様な状況に適応した、効率的・効果的な記録作業を目指し、実践した。保存修復における記録の重要性を共有し、また国内の様々な文化遺産保存における今後の導入が期待された。 <u>3. 壁画の保存修復(第5次ミッション)</u> 11月14日～12月4日にかけて、第5次ミッションを派遣し、アジャンター壁画に特有な問題点に対する実践的な修復方法の定着を目指した。壁面に塗布されたシェラックの劣化の問題、コウモリの糞尿による被害に対して、インド考古局の若手専門家とともに状態観察、化学的な試験を行い、壁画の適切な保存修復方法を検討するための試験的なクリーニングを行った(右写真)。本年度は本事業の最終年度にあたることから、保存状態の記録・分析から修復作業にいたるまでの一連のプロセスを再確認することで、実践的な保存修復にむけた経験値の向上となった。			
			
【実績値】 報告書1冊 ①「東京文化財研究所とインド考古局との壁画保存に関する拠点交流事業」2010年度業務報告書			
【受託経費】 30,685千円(拠点交流事業 モンゴル、中央アジアを含む。)			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8038

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 53-4

中期計画の項目	5 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業 モンゴル（受託）（(2)-ア）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 清水真一
【スタッフ】 友田正彦、二神葉子、秋枝ユミイザベル、康 成源（以上、文化遺産国際協力センター）、北野信彦、本多貴之（以上、保存修復科学センター）、高妻洋成、脇谷草一郎、田村朋美（以上、奈良文化財研究所）			
		【年度実績概要】 平成 22 年度は、モンゴルで(1)建造物保存、(2)碑文・岩画の保存に関する技術交流、研修を行った。 (1) 建造物保存に関する研修 1. 6 月 26 日～7 月 3 日の日程でミッションを派遣し、ウランバートルのモンゴル教育・文化・科学省（MECS）及びセレンゲ県のアマルバヤスガラント寺院で、文化財の保存管理計画の策定についての協議及びワークショップを実施した。モンゴル側からは、MECS の関係者や、前モンゴルユネスコ国内委員会委員長、オルホン渓谷の文化的景観管理事務所長などが参加した。 2. 8 月 21 日～28 日の日程でミッションを派遣し、セレンゲ県のアマルバヤスガラント寺院で木造建造物の保存修復に関する研修ワークショップを開催した。モンゴル国立科学技術大学建築学科の学生を対象とし、保存修理設計に必要な事前調査について、建物の破損個所のマ	
碑文に見られる赤色物質の調査（セルベン・ハールガ）		ッピングなどの実際の作業を行った。 3. 2 と同時期に、アマルバヤスガラント寺院周囲に保護区域を策定するため、MECS やセレンゲ県、および村の関係者とともに、現地調査及びワークショップを実施した。 (2) 碑文・岩画の保存に関する研修 1. 8 月 18 日～28 日、ヘンティ県のセルベン・ハールガ、アラシャーン・ハダの 2 箇所でのミッションを実施した。目的は、両遺跡の保存について検討するうえで必要な保存科学的な手法に基づく遺跡の現状把握、モンゴル専門家への調査法に関する技術移転である。モンゴル側は文化遺産センター（CCH）から 4 名が参加した。今回は、石材の構造的な安定性および状態の調査をより詳細に実施した。具体的には、節理面や層理面の走向・傾斜の観察・測定、石材の表面温度や水分量、岩石の亀裂幅の現状の記録、析出した物質や岩体から浸出する水の分析などである。また、環境計測およびそれぞれの遺跡で見られた赤色の物質の分析も実施した。 2. 12 月 12 日～25 日、CCH の専門家 2 名を日本に招へいし、奈良文化財研究所で主に石材の保存処理とその評価に関する研修を行った。同時に、文化無償資金協力による供与が検討されている機材に関する研修を実施した。	
【実績値】 「東京文化財研究所とモンゴル教育・文化・科学省および文化芸術局との拠点交流事業」2010 年度業務報告書 2 点（建造物、碑文・岩画） 『モンゴル国アマルバヤスガダランド寺院の保存修復に関するワークショップおよび研修－保存管理計画ワークショップおよび建造物保存修復調査研修－』 『モンゴル国ヘンティ県所在セルベン・ハールガ、アラシャーン・ハダ遺跡における平成 22 年度活動報告』			
【受託経費】 拠点交流事業 インドに含まれる。			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8039

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 53-5

中期計画の項目	5 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業 中央アジア（受託）（(2)-ア）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 清水真一
【スタッフ】 山内和也、島津美子、影山悦子（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、松岡秋子（客員研究員）、森本 晋（奈良文化財研究所）、増田久美、佐藤由季、エミリー・シェクルン、ステファニー・ボガン、マーティン・レーマン（以上、保存修復家）			
【年度実績概要】 「中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の枠組みにおいて、中央アジア諸国の文化財保存修復専門家間のネットワーク作りに貢献し、幅広い技術交流、人材育成の促進を図ることを目的とする。本事業では、タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所と文化遺産保護のための協力に関する合意書にもとづき、タジキスタン国立古代博物館が所有する壁画の保存修復活動を通じ、若手タジク人保存修復家の育成を目指す。 1. 本年度実施ミッション 平成22年度5・6月に第8次、10月に第9次ミッション、平成23年2・3月に第10次ミッションを実施し、タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の保存修復作業を現地の研修生とともにに行った。 第8次ミッションでは、カフィルカラ遺跡から出土した壁画断片と、カライ・カフカハ I 遺跡から出土した壁画断片を対象に、それらを新しい支持体に設置するマウント処置の試験を実施した。第9次ミッションにおいては、試験の結果をふまえ、さらなる改良を加えた。合計9点の壁画断片の保存修復およびマウント処置を完了し、博物館の展示室に設置した。 3年間の研修を通して、タジク人研修生は壁画断片の取扱方法、クリーニング、接合作業、強化処置、側面・表面の充填、新しい支持体への設置まで、一連の保存修復処置に必要な知識と技術を習得した。今後の課題は、壁画の状態に応じて、どのような修復処置が適切かを見極める能力を身につけていくことである。 2. ワークショップ開催 10月末に古代博物館において第3回目となるワークショップ「中央アジア出土壁画の保存修復」を開催した。中央アジアのタジキスタン、カザフスタン、トルクメニスタンに加え、ロシア（エルミタージュ博物館）、中国（敦煌研究院）の保存修復専門家を招聘し、意見交換および技術交流を行った。今回のワークショップは、壁画断片を新しい支持体に設置するマウント処置をテーマとし、実習をおこなった。			
【実績値】 報告書2件： ①ワークショップ「中央アジア出土壁画の保存修復 2010」 ②「東京文化財研究所と中央アジア諸国における文化財保護に関する拠点交流事業」タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の修復（第8次、9次、10次ミッション）2010年度業務報告書			
【受託経費】 拠点交流事業 インドに含まれる。			



新しい支持体の作成

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8040

業務実績書 (受託事業)

研究所 No. 53-6

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト (フェーズ I) にかかる国内支援業務 (受託) ((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 清水真一
【スタッフ】 山内和也、邊牟木尚美 (以上、文化遺産国際協力センター)、松田泰典、藤沢 明、伏屋智美、末森 薫 (以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 エジプトで 2013 年開館予定の大エジプト博物館附属施設である保存修復センターの設立に関し、国際無償技術協力を担う独立行政法人国際協力機構 (JICA) より要請を受け、2009 年 6 月から事業を受託し、保存修復分野における人材育成と技術移転に関する協力を開始した。協力内容は、1. 計画策定支援業務、2. 研修支援業務、3. 専門家派遣支援業務、4. その他、に大別される。 1. 2011 年度開始を予定しているフェーズⅡのための支援を実施した。保存修復専門家に協力を要請し、2009 年に作成した各保存修復人材育成プログラムを取りまとめ、修正し、「フェーズⅡ保存修復人材育成事業計画 (案)」を作成した。 2. 保存修復センタースタッフの保存修復に関する人材育成研修を行うため、JICA 派遣講師の専門家選定とその研修支援、受け入れ機関との調整準備を行った。支援を行った研修は、下記の 7 つである (カッコ内は開催時期と参加人数)。 ＜現地研修 (計 4 回)＞ 「第 1 回 IPM 研修」(5 月、12 名) 「移送・梱包研修」(7 月、16 名) 「遺物取扱い研修」(10 月、20 名) 「第 2 回 IPM 研修」(11-12 月、18 名) ＜本邦研修 (計 3 回)＞ 「保存修復マネジメント研修」(9 月、1 名) 「保存科学機器分析研修」(9-10 月、3 名) 「IPM (微生物) 研修」(9-10 月、2 名) 3. 専門家派遣支援業務として、プロジェクトの進捗状況を鑑みながら、現地で活動を行う短期専門家 2 名 (保存科学、文化遺産マネジメント) を選定し、派遣の支援を行った。 4. 保存修復の技術情報支援や、プロジェクトの活動に必要な各種教材・資料の作成支援、新技術導入の検討を行った。その一環として、各研修内での言葉の違いによる研修内容の誤解を避けるために 3ヶ国語 (日本語、英語、アラビア語) で書かれた保存修復専門用語の語彙集作成と支援を行った。また、7 月に日本の収蔵庫管理とデータ管理方法の視察のために JICA が収蔵庫管理者とデータベース構築マネジャーの 2 名を日本へ招聘した際、日本国内の博物館、美術館、研究所などの受け入れ機関の選定、調整を行い、支援をした。			
【実績値】 計画案 1 件 (①) 報告 2 件 (②～③) ① 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト (フェーズⅡ) 保存修復人材育成事業計画 (案)」 ② 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト (フェーズⅠ) 業務実施報告書 (上半期分)」 ③ 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト (フェーズⅠ) 業務実施報告書 (下半期分) 及び完了報告書」			
【受託経費】 16,482 千円			



IPM (微生物) 研修の様子

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8041

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 53-7

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム（受託） （2）-ア）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	国際情報研究室長 岡田 健
【スタッフ】 亀井伸雄（所長）、清水真一（文化遺産国際協力センター）、石崎武志、吉田直人、犬塚将英（以上、保存修復科学センター）、高妻洋成（奈良文化財研究所）、田中陽子、中村力也（以上、宮内庁正倉院事務所）、西尾太加二（静岡県埋蔵文化財調査研究所）、岡 興造（国宝修理装こう師連盟）、城山好美、依田尚美（以上、松鶴堂）、木部 徹、島田 要、加藤玲子（以上、資料器材保存）、増田久美（絵画修復家）、金 宣伶（韓国国立文化財研究所）、趙 娟兌（韓国国立中央博物館）			
【年度実績概要】 本事業は、公益財団法人文化財保護芸術研究助成財団の委託を受け、中国文化遺産研究院との共同により、2006-2010 年の 5 年間で、シルクロード沿線の文化財保護修復技術のレベルを引き上げることを目的として、新疆、青海、寧夏、甘肅、陝西、河南の 6 省・自治区からの研修生を対象に土遺跡、古建築、考古発掘現場出土品、陶磁器・金属器、壁画、紙類、染織品の保護修復および博物館技術の 8 項目の専門分野について、トレーニングを行うものである。 1) 染織品保存修復専攻 期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日）、研修員の人数：12 名 期間中は日中両国の講師による指導が行われ、日本からは 4 名の専門家を派遣した。また韓国から 1 名の専門家を招へいた。 2) 壁画保存修復専攻 期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日）、研修員の人数：14 名 期間中は日中両国の講師による指導が行われ、日本からは 2 名の講師を派遣した。また韓国から 1 名の専門家を招へいた。 両コース共通科目の講師として、日本から 8 名を派遣した。 3) 総括シンポジウム：5 年間で 8 項目の研修コースが終了するにあたり、12 月 15 日から 17 日の日程で、これを記念し総括するためのシンポジウムを開催した（主催：中国国家文物局、担当：中国文化遺産研究院、協力：文化財保護芸術研究助成財団・東京文化財研究所・日本サムスン・中国サムスン）。研修生の約 8 割にあたる 80 名以上の研修生が参加し、各コースから数名ずつが代表して発表を行った。日本からは 5 名が参加し、4 つの発表を行った。5 年間の成果に対して、中国国家文物局から財団・当研究所・日中両サムスンに対して、“文化遺産保護榮譽獎”が授与された。			
【実績値】 染織品保存修復専攻 期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日）、研修員の人数：12 名 壁画保存修復専攻 期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日）、研修生の人数：14 名 報告書：詹長法・岡田健主編『古建築保護論文集』（中国・文物出版社、2010 年 12 月）、詹長法・岡田健主編『博物館技術論文集』（中国・文物出版社、2010 年 12 月）、詹長法・岡田健主編『土遺跡保護研修報告』（中国・文物出版社、2010 年 12 月）、（公益財団法人）文化財保護芸術研究助成財団編『シルクロードよ永遠なれ』（2010 年 11 月、編集協力）			
【受託経費】 7,472 千円（うち間接経費 679 千円）			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8042

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 53-8

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推薦		
【事業名称】	ユネスコ/日本信託基金 バグダードにあるイラク博物館の保存修復室の復興プロジェクト (受託) ((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 有村 誠、影山悦子、邊牟木尚美、島津美子、鈴木 環、安倍雅史 (以上、文化遺産国際協力センター)、岡田 靖 (東北芸術工科大学)、笹岡直美 (立正大学)、田川新一朗 (箭上文化財修復)、片岡太郎 (東北大学)			
【年度実績概要】 当事業は、イラク国立博物館の保存修復室の復興支援を目的に 2005 年度に開始され、本年度で 6 年目を迎える。 本年度は、イラク国立博物館より、アリ・ガーニム氏、ナフラ・ナビール氏、ハディール・アブドゥルハーディ氏の 3 名の保存修復専門家を日本に招聘して研修を行った。 研修は 9 月 22 日から 12 月 9 日にかけて、およそ 3 カ月に渡り行われた。今年度はイラクからの要請に応じ、「文化財の保存修復および分析調査のために使われる機器に関する研修」、「金属製品の保存修復研修」、「木製品の保存修復研修」を実施した。 まず、9 月下旬から 10 月上旬にかけて、東京文化財研究所にて走査型電子顕微鏡や蛍光 X 線分析装置などの最新機器を使った分析に関する研修を実施した。また、研修の一環として、株式会社日立ハイテクノロジーの見学も行った。 10 月中旬から 11 月上旬にかけては、「金属製品の保存修復研修」を行った。まず、金属製品の保存修復に関する基礎的な講義を実施した後、東京大学総合研究博物館から拝借したイラン、デーラマン出土の金属製品を対象に保存修復実習を行った。 11 月中旬から 11 月下旬までは、「木製品の保存修復研修」を行った。岡田靖氏、笹岡直美氏、田川新一朗氏、片岡太郎氏を講師に招き、松戸市立博物館所蔵の奥山儀八郎作の木製看板を対象に保存修復実習を行った。 本年度は、ユネスコ/日本信託基金による本事業の最終年度にあたる。過去、6 年の間に、日本で研修を受けたイラク人保存修復専門家の数は、20 人以上におよぶ。いずれの研修生も、意欲的に研修に取り組んでいたため、日本で学んだ技術を生かしイラク国立博物館の復興に役立ててくれることが期待できる。			
			
【実績値】 報告 1 件 UNESCO/Japanese Funds-in-Trust Project “Restoration of the Laboratories of the Iraq National Museum in Baghdad”: Final Report			
【受託経費】 82,682USD			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8043

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 53-9

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ/日本信託基金 タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業(受託)((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 清水 真一
【スタッフ】 友田正彦(文化遺産国際協力センター)、井上和人、田代亜紀子(以上、奈良文化財研究所)、上野邦一(奈良女子大学)、青木繁夫(サイバー大学)、桃木至朗(大阪大学)、坪井善明(早稲田大学)			
【年度実績概要】 ハノイの都心に立地するタンロン皇城遺跡は、11世紀初頭の大越国建国以来、歴代の王朝が拠点とした宮城の中核域に関する遺跡である。指定対象としての遺跡は、2002年に国会議事堂建設予定地で発見された李・陳朝期の考古学的遺構と黎朝期以降の地上遺構を含む皇城中核部の遺跡とで構成されている。その後、日越両政府の合意に基づき両国専門家による協力体制によって調査研究等が行われてきた。 本事業は、歴史・考古・建築・保存科学・社会学および管理計画策定等の各分野専門家を現地に派遣し、ベトナム側専門家や遺跡保存センター、社会科学院考古研究所等の現地関係機関との協力の下、同遺跡の歴史的文化的価値をさらに明らかにするとともに、今後のより良い保存に向けた技術的検討と保存管理体制強化を含む総合的支援を行うことを目的としている。 事業初年度である今年度は、以下の現地ミッションを派遣し、現地調査および技術研修等を実施した。 5月:保存修復班6名および保存管理計画班1名 8月:保存管理計画班1名および歴史班4名 11-12月:保存修復班5名および保存管理計画班2名 12-1月:歴史班2名 1月:考古班3名 2月:保存管理計画班2名 また、1月に社会科学院考古学研究所より2名を招聘し、奈文研にて出土木材保存研修を実施した。さらに、歴史班においては関係論文翻訳作業等も実施している。			
【実績値】			
【受託経費】 225,500USD			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8044

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 82-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	関西大学博物館所蔵重要文化財附縄文土器破片および壺形土器破片の復元修理（受託）（(1)）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】	北野 信彦（保存修復科学センター）、犬竹 和（修復家）		
【年度実績概要】 本事業で復元修理を行った縄文土器破片・壺形土器は、大正8年に大阪府藤井寺市国府遺跡から出土した資料である。同遺跡から出土した縄文鉢形土器（平成18年度受託研究にて修復完了）、籠型土器（平成19年度受託研究にて修復完了）、高坏土器（平成20年度受託研究にて修復完了）、縄文土器破片・壺形土器（平成21年度受託研究にて修復完了）などと共に重要文化財に指定されている。本資料も、近年にいたって、以前の復元で使用された修復材料の劣化が認められ、再修復を要する状態にあった。使用されていた石膏や接着剤は、経年変化による劣化が著しく、本資料の取り扱いにも支障をきたすような状態であった。そこで、平成18年度から平成21年度までの受託研究に引き続き、本資料の再修復を行うこととなった。今回の再修復でも土器が展示や学術研究に活用されることを目的とし、石膏に代わる土器修復材料であり、質感・耐久性などにすぐれた補修用擬土を使用して修復した。			
概 要 ◇修復対象 縄文土器破片1点・壺形土器2点 ◇修復概要 1) 解体およびクリーニング・・・劣化した石膏は超音波メスで除去。接着剤は有機溶剤を使用して除去し解体した。表面の汚れは蒸留水を少量綿棒に含ませて拭き落とした。 2) 土器の強化・・・劣化して脆弱になった土器破断面をアクリル樹脂で強化した。 3) 接合・・・アクリル樹脂を使用して破片を接合した。 4) 復元・・・補修用擬土を充填し、常温で乾燥後、整形し文様を施した。55℃の定温乾燥機に入れ樹脂を硬化させた。 5) 展示台の作成・・・支えが必要な壺形土器1点については桐製の展示台を作成した。			
【実績値】 受託事業報告書 1件 本事業は関西大学から依頼			
【受託経費】 998千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8045

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	(社) 奈良県看護協会第2センター(仮称)新築工事のための発掘調査(受託)((1))		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 番 光、玉田芳英、廣瀬 覚、庄田慎矢、諫早直人〔以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【年度実績概要】 本調査は、(社)奈良県看護協会第2センター(仮称)新築工事のための事前調査である。調査地は飛鳥川の東岸、藤原京跡右京六条二・三坊にあたり、西二坊大路およびその東西側溝の検出が予想された。調査区の25m 南では、1989 年に奈良国立文化財研究所が発掘調査をおこない、西二坊大路東側溝の可能性のある古代の溝2 条を確認している。また、調査地は弥生時代の集落遺跡である四分遺跡の西南部にもあたり、調査区の一部において下層調査をおこなった。調査期間は2010 年10 月7 日から11 月29 日まで、調査面積は280 m ² である。 調査の結果、藤原京跡西二坊大路の東西両側溝については、南北溝 SD10930・SD10933 を検出したが、埋没時期や遺構の位置等から、確定するには至らなかった。東側溝については、1989 年の調査から推定される位置に南北溝 SD10930 を検出した。出土遺物より SD10930 が中世に埋没したことはほぼ確実であろうが、条坊側溝が中世まで何らかの形で利用されていた可能性など、都城の条坊遺構について今後検討すべき新たな視点を得た。西側溝については、推定される位置に遺構は検出されなかったが、推定位置より少し西に平安時代に埋没した南北溝 SD10933 を確認している。調査地周辺には条坊遺構の遺存する可能性が十分残されていることが判明した。 下層調査においては、調査区東側で弥生時代中期の溝 SD10950、調査区西側で弥生時代後期の溝 SD10951 を検出した。調査地は四分遺跡の集落の一部であったことが確認されたが、住居跡や墓地などは確認されず、集落のはずれであったことがうかがわれる。四分遺跡の集落構成を考察するうえで重要な知見を得た。			
			
調査区全景(東から)			
【実績値】 論文数等 1 件(論文1 件①) ① 番 光・高橋透・森先一貴・廣瀬覚「右京六条二・三坊の調査―飛鳥藤原第167 次」『奈良文化財研究所紀要2011』2011.6(予定) 出土遺物 土器・土製品13 箱、軒瓦4 点、丸平瓦2 箱、石器19 点、金属製品1 点など 記録作成数 遺構実測図18 枚、写真(4×5)32 枚			
【受託経費】 3,208 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8046

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-2

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	大和紀伊平野農業水利事業（二期）に係る埋蔵文化財発掘調査（受託）（(7)）		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 廣瀬 覚、小田裕樹、玉田芳英、次山 淳、木村 理恵、若杉智宏、高橋 透、庄田慎矢、諫早直人、石田由紀子、黒坂貴裕、番 光 [以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）]、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛 [以上、企画調整部]			
【年度実績概要】 大和平野支線水路等その3（県営飛鳥2号幹線（右岸）その3）改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京左京七・八条一坊（橿原市上飛驒町）にあたる。工事区域は、総長 325.520mであるが、区域中央の約130m分は既設管との重複部分にあたるため、事前協議により立会に対応することとなった。このため調査は、中央の立会区間を挟んで、北区（約156m×2m）、南区（約45m×2m）に別れて実施した。全体の調査面積は約402㎡で、平成22年11月29日より調査を開始し、平成23年3月3日をもって終了した。 北区では、大部分が既設管の設置範囲と重複しており、遺構および遺構面の残存状況は良好ではなかったが、柱穴約10基、溝1条等を検出した。遺構の検出面は、調査区北側に隣接する飛鳥藤原第115次調査区の遺構検出面と層位、および標高がほぼ一致しており、出土遺物からも概ね7世紀中頃から藤原宮期のものと理解できた。衛門府と想定されている第115次調査区の遺構群との対応は、調査区間の距離がややあることから十分な検討を行うことができなかったが、南へと7世紀代の遺構が確実に展開する状況を把握することができた。このほか、明確な遺構検出には至らなかったが、古墳時代以前の遺物も少量出土した。 南区では、柱穴約30基、溝2条を検出した。溝埋土には5世紀末から6世紀後半にかけての須恵器・埴輪片が含まれており、西側に隣接する丘陵上に古墳が存在することが推測された。一方、柱穴には一部、中世段階のものと考えられるものが含まれるが、その他は古代の建物に伴うものと推定でき、掘方埋土から7世紀中頃の土器が出土したものもあった。北区同様に、7世紀中頃から藤原宮期にかけて一定の土地利用があったことが判明したが、調査範囲が限られていたため、建物の全体像や遺構変遷を明らかにする作業は、周辺の調査の進展に委ねることとなった。 以上のように、本事業では、水路付け替え工事に伴う発掘調査を円滑に遂行し、藤原地域の埋蔵文化財における基礎資料を蓄積することができた。また、発掘調査中、および調査終了後における調査地外の既設管撤去工事では、研究員の立会のもと工事が埋蔵文化財に影響を与えないよう監視した。			
			
北区調査風景		中央区立会風景	
【実績値】 論文等数 1件 ① ①廣瀬覚・小田裕樹「藤原京左京七条一坊・八条一坊の調査―第166次」『奈良文化財研究所紀要2010』2011.6（予定） 出土遺物 出土遺物 土器14箱、瓦類31点、木製品3箱、動植物遺存体2箱 記録作成数 遺構実測図43枚、写真（4×5）101枚			
【受託経費】 5,382千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8047

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-3

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	興福寺旧境内（奈良第1地方合同庁舎）の発掘調査（受託）（1）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 箱崎和久、馬場 基、芝 康次郎（都城発掘調査部） 中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（企画調整部）			
【年度実績概要】 奈良県合同庁舎オイルタンク設置にともなう事前の発掘調査で、平成22年4月13日～5月12日にかけて、東西5m×南北3mの15㎡の調査をおこなった。 調査区の南半は現合同庁舎建設時あるいはそれ以前に、標高89.9m（地表下1.6m）まで大きく破壊されていた。それより下層には13世紀の土師器を含む土坑が重複しており、記録を取りながら掘り下げた。標高89.0m（地表下2.5m）付近では、北壁にかかる東西方向に石や瓦を敷いた遺構を検出した。石は人頭大の河原石で、石の下面は凹凸をもつものの、上面が平滑な面となるよう据えられていた。石のない部分には平瓦が置かれている。石は比較的精良な整地土の直上に据えられており、瓦の下面には溝の埋土と同様の土があることから、ほんらいはすべて石組みであったが、部分的に瓦で改修されているものと考えられる。この遺構は東西方向の溝の底石と判断した。溝の南辺を確認したものの北辺は調査区の北方に続くため、溝幅は明確でない。埋土はマンガンの沈着した灰褐色土で瓦片を含んでいた。石組みは調査区の中央部分のみで検出し、その長さは2.1mほどであり、東および西は先述した土坑で削平を受けている。 また西壁にかかる南北溝を確認した。検出面からの深さは30cmで、底面は地山（明黄色砂礫）が現れ、地山は西壁にむかってやや立ち上がるので、西壁付近がこの溝の西肩になる。先述した北壁にかかる東西石組溝とこの南北溝との関係については、いずれも上層の土坑で削平されており、関係は明確でない。ただし溝の深さからみて、東西石組溝の方が新しいと考えられる。南北溝からは奈良時代の瓦が出土しており、古代の遺構の可能性がある。			
			
北壁で検出した石組溝底石			
【実績値】 出土遺物：軒丸瓦4点、軒平瓦1点、丸・平瓦整理箱24箱、土器整理箱12箱 記録作成数：実測図（A2判）4枚、遺構写真（4×5）6枚			
【受託経費】 612千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8048

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-4

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	小谷地遺跡出土遺材についての建築史的研究(受託)(1)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	箱崎和久(都城発掘調査部)
【スタッフ】 箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡、黒坂貴裕、番 光(以上、都城発掘調査部) 中村一郎(企画調整部)			
【年度実績概要】 秋田県男鹿市の小谷地遺跡において、昭和 39 年から 3 ヶ年にわたる発掘調査で出土した多量の木製部材は、男鹿の埋没家屋としてつとに有名であった。平成 21 年 6 月から秋田県埋蔵文化財センターが開始した発掘調査でも、過去の調査と同様、多量の木製部材が出土し、やはり埋没家屋の部材と考えられたため、平成 21 年度から奈良文化財研究所が出土遺材の調査・研究の委託を受け、平成 22 年度はその第 2 年目にあたる。 調査方法は、秋田県埋蔵文化財センターで作成した実測図の下図(部材外形線の描画)に、観察所見による描画を追加することによって部材の実測図を完成し、あわせて部材に対する所見や加工痕跡、使用痕跡などの所見を記入した調査票を作成する。同時に、手持ちのカメラによって、全体ならびに調査所見を裏付ける細部写真の撮影をおこなう。以上の調査を 1 週間(計 5 日)おこない(平成 22 年 4 月 19 日～23 日)、また実測部材について大判写真による撮影をおこなう(平成 22 年 6 月 7 日～9 日)。以上 2 ヶ年の成果を秋田県埋蔵文化財センターが制作する報告書に掲載するため、報告書の体裁等の指示を秋田県埋蔵文化財センターから受け、版下の作成と部材に対する解説を執筆した。この過程で生じた疑問点についての補足調査を平成 22 年 11 月 18～20 日におこなった。 平成 22 年度の調査部材は 44 点であった。調査所見は昨年度の成果と大きく変わらず、大径材を打ち割って得た材が割肌の部材が多いこと、なかには出土遺構では使用していない穴や欠きがあるため、転用材と考えられる部材があること、が特徴としてあげられる。驚くべきことは、建物遺構から出土した柱根が、大径材をミカン割りにして得た材を使用している点で、いわゆる丸太をそのまま使用している材はほとんど見られないことである。豊富な森林資源に裏打ちされた使用法であると同時に、優れた木材加工技術をもつと考えることもできる。これらの調査成果から、埋没建物とみられたまとまった部材群は、発掘調査で得られた所見と同様、建物所用の材でなく土木構築物の材である可能性が大きい、と結論づけた。一方で土木構築物の遺材を詳細に調査した例は少なく、今後発見が期待される同様の遺構に対して、調査方法や調査の視点といった点で、貴重な成果を得ることができたと考えている。 これら 2 ヶ年の成果は秋田県埋蔵文化財センターが制作する報告書に掲載する予定である。			
			
建物柱根の底面 年輪の様相から、大径材から割り出した材であることがわかる。底面はヨキで加工しており、使用した道具の刃の幅と使用方向が判明する			
【実績値】 記録作成数：実測図 44 枚、写真(4×5) 50 枚 報告書用作成版下 64 枚 報告書本文 38 ページ 箱崎和久ほか「出土遺材」『小谷地遺跡発掘調査報告書』(仮称) 秋田県埋蔵文化財センター、2011(予定)			
【受託経費】 1,506 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8049

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-5

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	平城京跡 右京三条一坊十坪 西一坊坊間西小路の発掘調査(受託)(1)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 海野 聡、中川あや、森川 実、渡邊晃宏(以上、都城発掘調査部) 中村一郎・栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 本受託事業は、平城京跡右京三条一坊十坪(重点地区平城宮跡周辺)における共同住宅新築にともなう事前の発掘調査である。調査区は南北幅6m×東西幅10mの長方形を呈する。調査面積は60㎡、調査期間は2010年11月10日～11月16日である。 調査成果は次の通り。 (1) 基本層序 調査区の基本層序は次の通り。現地表から順に、表土・整備に伴う盛土(約60cm)、旧耕作土(約20cm)、旧床土(大きく2層に分かれる。あわせて約50cm)、黄灰色粘土層(地山)が存在する。旧床土を掘り下げた面で、穴や流路などの遺構を検出した。遺構検出面の標高は約64.15mである。 (2) 検出遺構 流路 : 調査区東半分で、北西から東南方向に流れる流路を確認した。東岸は検出できず、調査区の東側に存在するとみられる。幅は調査区内だけで約4.9m、深さは0.7m以上におよぶ。遺物は出土せず、形成された時期は不明。 小穴列 : 調査区東寄り、流路上で確認した南北小穴列。3基検出。一辺50cm前後で隅丸方形～円形の穴が約5尺(1.5m)の間隔で並び、若干、東に振れる。深さは約5～10cm。いずれも、柱穴の抜取痕跡の可能性がある。埋土から遺物は出土せず、時期は不明。 本調査区は、平城京右京三条一坊十坪、西一坊坊間西小路想定地にあたり、今回の調査で坊間西小路の東側溝が検出される可能性があった。しかし、後世の耕作によって、奈良時代の整地土および地山の一部が削平されており、存否の検証が不可能であった。			
【実績値】 出土遺物: 土器整理箱1箱分、瓦整理箱4箱分、金属製品1点。 記録作成数: 実測図3枚、写真(4×5)3枚、(デジタル)27枚			
【受託経費】 415 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8050

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-6

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	朱雀大路緑地遺跡発掘調査(受託)(1)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 井上 和人
【スタッフ】 浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克(以上、都城発掘調査部) 中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 平城京左京三条一坊一・二坪(奈良市二条大路4)における、平城京資料館(仮称)の建設にともなう試掘調査。調査面積 1030 m ² (南北 103m、東西 10m)。調査期間は平成 22 年 12 月 20 日～平成 23 年 3 月 30 日。 調査区は、左京三条一坊一・二坪の東寄りに位置し、調査面積は 1030 m ² (南北 103m、東西 10m)である。遺構検出面は現地表下約 2 m にあり、基本層序は上から、整備にともなう盛土、旧耕作土、旧床土、遺物包含層、黄色粘質土(整地土:遺構検出面)となり、それ以下のベース土は、砂と粘土が互層となる。調査区西半を、流路とみられる砂層が覆い、ベース土も粗砂や細砂が入り込むことから、整地以前は何度も水が流れたと考えられ、秋篠川の氾濫の跡とみられる。 検出遺構は以下のとおりである。 ・三条条間北小路…南北幅約 1 m 程度の東西溝(側溝)。両側溝の心の間距離は約 6.2m。 ・坪内道路…左京三条一坊一坪を南北に二分する東西溝(側溝)。両側溝の心の間距離は約 9.5m。 ・掘立柱建物…調査区北端で掘立柱建物 2 棟を検出。一つは南北にならぶ柱穴 3 基で、径 25 cm 程度の柱痕跡を残す。柱間寸法は約 3.9m(13 尺)。東西棟建物の西妻の柱筋とみられる。もう一つは、調査区の東壁で断面を確認した南北の柱穴 3 基。柱間寸法は北から 6.0m、2.7m ととれる。抜取穴から円筒埴輪片が出土。 ・井戸…抜取の直径約 4m、方形の木製井戸枠が出土。井戸の内法は 2.3m。埋土に多量の遺物を含む。奈良時代とみられる。 この他、掘立柱東西塀 1 条を検出した。			
【実績値】 大林 潤ほか「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011(予定) 大林 潤「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈文研ニュース』2011(予定) 出土品 : 瓦 60 箱、土器 37 箱、金属器 16 点、木簡 30 点。 記録作成数: 実測図 17 枚、遺構写真(4×5) 100 枚。			
【受託経費】 27,068 千円			